

CAMINOS-9 (*michi* : 道)  
(*Ensayos sobre la cultura de la peregrinación*)

Aiko Arai\*  
Bernardo Villasan\* \*\*

ÍNDICE GENERAL

1. 「南米大陸、最果てのパタゴニアへの巡礼の道」(その三)  
CAMINO DE PEREGRINACIÓN A SUDAMÉRICA Y PATAGONIA.  
Por Aiko Arai (新井 藍子).
2. DOS CAMINOS: BUDISMO Y CRISTIANISMO (II)  
(Ensayo desde una hermenéutica cristiana)  
Por Bernardo Villasan.

---

\* *Aiko Arai*. Ex profesora de la Universidad de Fukuoka (Japón).

\*\* *Bernardo Villasan*. Catedrático Emérito (名誉教授) de la Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka (Japón).

## 1. 「南米大陸、最果てのパタゴニアへの巡礼の道」(その三) CAMINO DE PEREGRINACIÓN A SUDAMÉRICA Y PATAGONIA.

Por Aiko Arai (新井 藍子).

(14) 第14日目 プエルト・チャカブコ(チリ)へ入港、2月12日(水)

早朝6時半過ぎ、パタゴニア・フィヨルドのアイセン州の玄関口、プエルト・チャカブコが、濃紺と灰色の厚い雲の下に真っ黒な島陰となって横たわっていた。ちらほらと薄いおぼろげな灯りが頼りなげな感じがした。テンダーボートが着く渡し場だけが明るかった。一晚中かけて、船は南のタイタオ半島、北のロス・チョロス群島の間を曲がりくねって流れている非常に幅の狭いフィヨルドを進んで行ったのである。地図で見るとかぎりでは、この水路はマゼラン海峡と比べてもとても幅が狭い。しかも星も月も出ていない真っ暗な夜中である。船長の航行術は相当なものだと、ふたたび感嘆させられた。

およそ、8時ごろには、渡し場に到着した。いつものように、プエルト・チャカブコへ、ようこそという歓迎の看板に迎えられた。錨をおろした2艘の大型クルーズ船がすぐ近くに見えた。薄い灰色の霧が目の前のアンデス山脈に一面かかっている。今日は、太陽は1日中、隠れているのだろうか。

プエルト・チャカブコは、アンデス山脈に囲まれた小さな、夏でもひんやりとした、空気がきれいな港町である。1870年、フィヨルド多島海探検家で、チリの海軍大佐エンリケ・シンプソン(Enrique Simpson—1835～1901年)は、パタゴニア西部海岸から大陸の溪谷へ通じる水路を発見した。その溪谷の川は、彼の名前を取って<シンプソン川>と命名された。1870年から1875年まで、グァイテカス群島(ロス・チョノス諸島の少し北にある)、ロス・チョノ

ス諸島、アイセン川、パタゴニア運河およびサンタ・クルス川を探索して、港および投錨地の地図を作製し、港を建設した。建設された当時のプエルト・チャカブコは、まだ百十数名の小さな町であったが、しだいに重要な港町になっていった。すぐ傍のプエルト・アイセンは、チャカブコよりも積み出し港として発展し、現在では、州都コイアイケにつぐ2番目に大きな町で2万人以上の人口を擁している。サーモン、マトンなどの主要な産産物が、出荷されている。

今日は、チャカブコからおよそ80キロ離れたところにあるリオ・シンプソン国立保護区を訪ねることになっているが、その前に船が通過したアイセン州に属するロス・チョノス諸島 (Archipiélago de los Chonos) に居住していた先住民、チョノスについて書いてみたい。

### 1) 先住民チョノス族

ロス・チョノス諸島は、チロエ島 (Archipiélago de Chiloé) の南からタイタオ半島の北まで伸びている。大小それぞれ形の異なった千以上の島から成り立ち、無数の水路が縦断、横断している。西から東への運河は太平洋と大陸の海岸を結んでいる。

およそ、6千年前からその海岸には、カヌー民族が住んでいた。チョノス民族の祖先と考えられているが、先記したフエゴ島民のアラカルフとの類似性を指摘する人類学者もいる。カヌーの一種であるダルカスという船を漕ぎ、チョノス語を話していたチョノス民族は、およそ18世紀末或いは、それ以降に消滅したと推測されている。漁業、採集民族で男たちはアシカや魚を獲り、女たちは魚介類や海藻類を採集していた。また、犬を飼って、その毛で荒い布地を織っていた。

16世紀半ばころ、チリ諸島の中でいちばん大きな島であるチロエ島（Isla Grande de Chiloe—グァイテカス群島の北に位置する大きな島）の北方には、マプーチェ語を話す漁業、農耕に従事する民族がいた。何世紀も前に、大陸からここに到達したウィリチェ族あるいはクンコ族として知られている。

先記したように、チョノス族として知られていた民族は、16世紀中葉のスペイン植民地時代に現在のロス・チョノス諸島に住んでいたと考えられている。常に大陸へ移動しながら、狩猟、採集で生活を営んでいたが、時には、ジャガイモなども作っていた。隣接するタイタオ半島まで達しない諸島の最南端には、別名の集団民族が住んでいたとする年代記録者がいるが、チョノス族との類似性から、同じ民族であるという説もある。

1550年代には、スペイン人のコンキスタドールたちが、諸島の入り組んだ水路地域を探検し始めた。1553年、マゼラン海峡探検への途中で探検隊を指揮したフランシスコ・デ・ウジョア（Francisco de Ulloa）が初めて、その地域の先住民と接触した。ロス・チョノス諸島と呼ばれている諸島およびもっと南の地域に着いた時に、原住民との争いがあったと、探検記録に記されている。

1557年のスペイン人、ファン・ラドリジェロ（Juan Ladrillero）指揮下のマゼラン海峡探検記録には、ウィリチェ族と呼ばれているカヌー民族についての記述が見られる。

16世紀後半には、チロエ島の征服が開始された。コンキスタドールたちには、土地と先住民たちがエンコミエンダ制により割り当てられた。グァイテカス群島の先住民の名前が記されていたのもあった。しかし、実際には、これらの先住民たちが住んでいるとされていた場所にスペイン人たちが遠征に行くのは、あまりにも遠方すぎる、という説もある。

1609年、チョノスの名前が初めてイエズス会神父によって記されている。

ロス・チョノス諸島を訪れて、彼らの言葉でキリスト教理を伝えたが、ウィリチェ族とは違い、とても困難であったと述べている。

1612年、チロエ島に居住していたイエズス会神父たちは、チョノス族のカシーケに招待されて、先のグアイテカス群島で彼らに宣教した。その年には、先住民自身によって礼拝を続けるための教会が建設された。しかし、チロエ島での聖務に時間をとられた神父たちは、1630年ごろには、グアイテカス群島訪問をやめてしまった。反対にチョノス族がチロエ島にやってくるようになった。女と金属の工芸品が目的であった。また、植民地警備隊の目の届かぬ離れた島々にいた先住民やスペイン人の家屋を襲うようになった。これらの襲撃者を捕まえたり、罰を与えたりすることが難しかったので、スペイン人はチョノスが居住している島々で同じように、彼らを襲撃した。さらに、捕虜として連れ帰り、奴隷にした。苦しい労役と食べものの違いでチョノスの大部分は生き長らえることが出来なかった。

1700年代初葉に、生き残ったチョノスはキリスト教の新信者として受け入れられた。それにより、スペイン人への労役やもろもろの義務から解放され、居住する島まで与えられた。そこには、イエズス会の伝道所も建設された。しかし、与えられた島での平安な生活が長続きしなかったため、スペイン人は、チョノス族を一定の場所に定住させたり、キリスト教徒にすることが非常に困難であると考えた。

18世紀中葉以降、チョノス族は、少しずつ農耕に従事するようになった。

彼らは、また、クジラ捕鯨にかけてはエキスパートで、クジラの油を小麦粉やその他の製品と交換するようになった。当時の年代記録によると、(海藻類や魚介類採集のため)海に長時間、潜ることにより命を縮めた女たちの数が増加し、それにつれて、チョノス族の人口が減少していった。純粋なチョノス族は、18世紀末には、消失したと考えられている。チョノスの大部分の男たちが、ウィリチェ族の女たちと結婚したからである。当時の彼らの子孫たちは、

チロエ島のスペイン人およびウィリチェ族の生活様式を採用していた。

19世紀には、チョノス族と同一であるとされるカヌー族についての記述がほとんど存在しない。20世紀になって、カヌー族が、チョノス族に出会ったという記録が残されている。

2006年には、調査団がタイタオ半島の未踏の内部を探查した。ここ2世紀間、外部の世界と接触なしにチョノス族が生存していたかもしれないという考古学的痕跡を探すのが目的であった。

チロエ島で行われた遺伝因子による研究では、この島よりもっと南にある諸島の住民たちとは異なった遺伝因子が発見され、フエゴ島民のそれに近かったことにより、チョノス族の祖先は、フエゴ島民なのではないかという説がある。

今までは、チョノス族の歴史を考察してきたが、少し、彼らの生活様式を眺めてみたい。チャンネルのウィリチェ族と同じようなダルカス—Dalcas と呼ばれている板船を漕ぎ、石と材木を使って錨として用いていた。周辺の入り組んだチャンネルやタイタオ半島の南、北部氷床に面したペナス湾まで漕いでいたと考えられている。

陸上では、皮に覆われた木材の小さな家屋或いは、洞窟に住んでいた。少グループに分かれていたが、主な社会的組織は家族であった。

食べものは、すでに、先記したように、海から獲れる魚介類、魚、海藻、アシカやクジラの肉などであった。17世紀初期には、時たま、ジャガイモや何らかの穀粒も食していた。宣教師との接触やチロエ島に居住するようになってからは、より農耕に従事するようになった。

槍、ハンマー、木や骨で造った釣り針、火打ち石、植物繊維による網などを造っている。

腰は海藻類で、上半身は、犬の皮或いは、毛で織ったマントで覆っていた。時折、縁なし帽を被り、顔は赤、黒、白などで塗っていた。魔術的礼拝を發展させていった。飛んでいるオウムの群れを見ない、或いは、食した魚介類の殻などを海に捨てないという戒律があった。ふつう、遺体は洞窟に運ばれた。

あまり記録に残されていないチョノス語は、カウエスカル族の言語(Kawesqar—チョノス諸島近辺の先住民)に非常に類似している、或いは、その方言と考えられている。

さあ、ここらあたりで、チョノス族とお別れして、リオ・シンプソン国立公園へ出発しよう。

## 2) パタゴニアを横断しながらリオ・シンプソン国立公園へ

氷河が削ってできたシンプソン川溪谷とアイセン州都のコイアイケ溪谷というふたつの溪谷に挟まれた国立公園までは、およそ80キロの道のりがある。両側の車窓に広がっているのは、放牧地帯である。たくさんの乳牛が草を食んでいる。この辺りの牧場では、羊も飼育しているが、姿が見えない。東に南米を縦断するアンデス山脈が厚い灰色の雲の下に長々と続いている。山頂に雪を被っている高い山々には、しだいに薄桃色の雲が現れて大気が明るくなってきた。今、西の太平洋のフィヨルドにあるプエルト・チャカブコを出発してアウストラル街道の一部を走っている。このアウストラル街道は、チリ・パタゴニアで最も美しい原始の姿を残したオフロードと言われている。最初に造られたのが、プエルト・アイセンとコイアイケ間である。8時半ようやく、灰色の雲が風に吹きはらわれて青い空が見えてきた。今までは、パタゴニア地帯のまるで迷路のように錯綜したフィヨルド水路を通りながら、碧い氷河を眺めながらクルージングをしてきた。今、陸のパタゴニアを横断しながら、すぐ近くに迫っている森林に覆われている青々としたアンデスの雄大な山々を観照すると

いうドライブで、異なったパタゴニアの顔を発見することになった。海上からと陸上からのパタゴニアはこんなにも違うのかと驚かされた。当然といえば当然かもしれない。ここは、先記した南部氷床、北部氷床、サン・バレンティン氷床近くの〈ペリグラシアル—Periglacial—氷河周辺〉地帯と呼ばれているパタゴニアステップ地帯である。今、まさに放牧に最も適したアンデス山脈の草原の中をバスが走っている。右手にシンプソン川が見えてきた。88キロメートルのこの大川は、アイセン州でいちばん大きな町であるコイアイケで、町の名を冠したコイアイケ川と交叉する。〈コイアイケ〉とは、先住民テウエルチェ族のアオニケンク語（Aonikenk）で〈ふたつの川に挟まれた場所〉の意味である。つまり、シンプソン川とコイアイケ川に挟まれたコイアイケ町を指す。先記したテウエルチェ族は、パタゴニア族とも呼ばれ、マゼランなどのヨーロッパ人が初めて出会った先住民である。〈巨人〉と航海記録には記されている。北東パタゴニアの南緯40～52度くらいまで広範囲に居住していたと考えられているが、ここ、北西パタゴニアのアイセン州の草原にも狩猟採集民として居住していた。後に、アオニケンク語はチリ中部、北西パタゴニアに居住していたマプーチェ族（アラウカノ）の言語にとって代わられた。ここで、国立公園に到着する前に、ほんの少し、寄り道をして、フエゴ島から離れたアンデス山脈の高原地帯に居住していたテウエルチェ族を訪ねてみたい。

### 3) アンデス山脈の麓のふたつの川に挟まれた大地のテウエルチェ族および新大陸の原住民社会における宗教

先記したように、パタゴニアの広範囲に住んでいたテウエルチェ族は、彼ら部族間で話す6つの言葉がそれぞれ異なっていた。そのひとつがアオニケンク語である。他はテウエルチェ語、パタゴニア語、などと呼ばれている。

アルゼンチンでは、2010年の国勢調査によると、3万人近くが生存していた。



彼らはアオニケンク語およびカステイーリャ語（スペイン語）などを話す。それとは別に、マプーチェ族とテウエルチェ族の混血コミュニティーが存在し、彼ら自身、〈マプーチェーテウエルチェ〉と呼称している。

チリでは、バンパや北西パタゴニアのマプーチェ族（アラウカノ）により吸収された者も多くいた。1905年、スペイン人によりもたらされた天然痘によってプンタ・アレナス近くに居住していたテウエルチェ族の一族が、カシーケを含めて消滅した。生き残った者たちがアルゼンチンに逃げ延びたが、なかには、後にアルゼンチン軍に討伐された。生き残りが、その後、チリに戻り、最後に目撃されたのが1927年だった。現在は純粋なテウエルチェ族は消滅したと、考えられている。

彼らの歴史を振り返って見ると、およそ、17世紀以前は、西から東、東から西へと移動していたが、スペイン人により南部のフエゴ島に馬がもたらされると、南から北へ、北から東へと広範囲に移動するようになった。冬期は、平原、海岸および湖岸などに居住していた。夏期は、パタゴニア中部、アンデス山脈および聖なる山と崇めたチャルテン山〈アオニケンク語で煙を吐く山の意〉へと上っていった。移動範囲が広がるにつれて、東西のアンデス山脈から太平洋に至る他の部族との文化的交わり、商業活動が活発になっていった。特に、バンパ、パタゴニアのマプーチェ族による影響を強く受けて、〈マプーチェ化—アラウカノ化〉が進み、彼らの習慣、言葉を採用するようになつた。

異なった部族の間で商品交換も盛んに行われ、19世紀半ばには、彼らの相互依存が認められた。たとえば、アオニケンク族がしとめた動物の皮や軟体動物類が果物、果実、植物の種、芽などと交換された。また、馬がもたらされたことにより、グアナコの肉から馬のそれを食するようになった。日本の或る地域（九州）では、馬肉を食している。彼らの習慣が日本にも伝わったのかもしれない。ここ、福岡でも、馬肉を供しているレストランがある。先の探検家で

あり、人類学者の関野氏によると、アマゾンやアンデスの先住民たちの祖先は、シベリアからベーリング海峡を渡って南米へやってきた。一方、日本列島にやってきた人類の一部もシベリアからやってきた、という。だとすれば、私たちは、同じ祖先を持っている可能性がおおいにある。彼ら一部は、南米に留まらず、日本列島にやってきて住み着いたのであろう、と示唆している。外観の類似点などを考えれば、その仮説は信憑性がある。

宗教の面では、大地の精霊たちの存在が信じられ、中でも〈火の大地〉精霊を信仰していた〈セルクナム族—Selknam〉のシャーマニズムがよく知られている。セルクナムは、別名オナで、テウエルチェと同様のフエゴ島民である。フエゴ島の北の高原および南の山に囲まれた高原にそれぞれ分かれて居住していた。狩猟採集民である。シャーマン（Xo'on）と呼ばれている宗教的職能者が、治療、祈祷、儀礼などを行った。新大陸の原住民社会の大部分で、シャーマンが重要な役割を果たしてきた。上記の活動の他に、動物や植物の主に働きかけて獲物や植物を確保するなど、集団全体の利益にかかわる問題に携わってきたと考えられる。セルクナムのシャーマンも狩猟者を手助けして、治療を施してきた。夢の中に現れた死んだシャーマンの霊の力を受けとっていた。18歳の大人になる若者たちへの通過儀礼では、超自然の存在を徹底的に教え込んだ。それは、肉体に厳しい苦痛を与える儀礼であった。

死者の埋葬では、家族は死者の持ち物を全部焼いてしまい、彼を大地に埋葬したら、忘れてしまうために、すぐにその場を離れなければならなかった。

死後の世界が信じられていた。死後、全ての神々の前で裁きかけられた。その裁きの場で、神々が彼らの王国に入ったり、永遠の生命を享受することを死者が拒否した場合は、地獄の女神や戦争の神々がそれぞれ、永遠の苦痛および、カオス、破壊を与えた、と信じられていた。

セルクナムが身体に絵を描くのは、厳しい寒さを緩和するためであり、顔面

に色を塗るのは、そのときどきの喜怒哀楽を表現するためである。日常的現実において、おのれの身体を土台にして实际的、精神的な創造を行っていたのである。

#### 4) リオ・シンプソン国立公園内を散策する

バスがシンプソン川の橋を渡った。橋の向こうには、雪を被ったアンデスの山々がすっかり明るくなった薄桃色の雲すれすれに神々しく横たわっていた。一瞬、その美しい風景に心が震えた。アマゾンとアンデスという名前は、長年、心の奥深くに鳴り響いていた。ふつうの旅人がそう簡単には行けないどこか、遠方にあり、冒険家だけが危険をおかしながら行き着ける世界の果てにあると……たぶん、その思いは子どもの頃読んだ世界冒険小説や映画によるものであろう。

3キロメートルの小路が公園内にある。出発地点に案内板が立てられていた。最初の居住者痕跡地へと続く道と書いてある。先記したテウェルチェ族が選んだ地がこちら一帯なのである。常緑樹や低木の杉が鬱蒼と草原を取り囲んでいる。1年中、樹木や草の葉が更新されて青々としている。しばらくの間、小路を歩いていくと、プエルト・チャカブコの建設者エンリケ・シンプソンの名を冠したシンプソン川溪谷に着いた。アイセン州は、およそ1600年前の最後の氷河期には、氷河に囲まれていたのである。世界の80%以上の氷河がチリにある。そして、このアイセン州には、南部、北部氷床などの氷河が広い面積を占めている。そのおかげで、世界の中で淡水がもっとも大量に保有されている。この溪谷は、氷河によって削られてできた溪谷で、母岩石には、その時にできた溝が何本も刻みつけられていた。周辺には、チリ特有の緑の丈の低い灌木がびっしりと絨毯のように敷き詰められていた。このような乾燥した冷たい風が年中吹きつける地帯には、矮性の杉や丈の低い灌木しか育たないのであ

る。溪谷は清澄な冷気に包まれ、流れる川の音しか聞こえない静かな場所である。ここで、平和に暮らしていたであろうテウエルチェ族の家族を思い浮かべていた。この小路を少し先に進むと、彼らが居住していた家屋があるらしい。家屋に近いこのシンプソン川は、身体を清めるのに適した神聖な場所のように思われた。雨が多い冬期はさぞ、寒かったであろう。平均気温は6度、夏期には10度を超えることがあるという。毛皮にくるまれているテウエルチェ族の写真を自然に思い浮かべていた。

シンプソン川の岸辺ちかくに斜めに傾いでる細い樹がある。何本かの細い枝先から、熱帯アメリカ特有の紫紅色のフクシア、パタゴニアではチルコ Chilco (学名、Fuchsia Magellanica) が花びらを下に向けて釣鐘草のように咲いている。辺りいちめん緑の中で、そこだけが、ぱっと華やかで美しかった。細い樹木は、みな片方に傾いている。常に一方からだけ吹いてくるパタゴニアの強い風に反対方向に傾いたままの姿勢を保っているようである。小路の先には、ブナ科のノトファーガスというアルゼンチンやチリでよく見られる、成長の早い樹木の森林がある。スペイン語では、<Coihue—コイウエ>と呼ばれていると、ガイドがおしえてくれた。また、地面ちかくに葉の大きな植物の群落があった。それは、ナルカー Nalca という茎が食べられる植物よと、微笑む。まだ、大学を出たばかりのような、愛らしいガイドのフロレンシアは、幅広い知識を持っている。アイセン州の気候、植物、先住民、探検家シンプソンにとどまらず、チリ国の産物では、養殖のサーモン、メルルーサ (タラ科の魚)、羊毛が盛んである、銅、錫、鉛など鉱物資源が豊富であることなどを熱意をこめて語ってくれた。

帰りのバスの中で、突然、フロレンシアが赤いベレー帽をとりだして被ってみせた。首に巻いている赤いマフラーとマッチして、いっそう愛らしく見え

た。パタゴニアでは、ベレー帽が有名であることをその時、初めて知った。チリの白人はスペイン系が中心で、バスク、アンダルシア、カスティーリヤ地方の出身者が多い。スペイン北部の寒いバスク地方では、ベレー帽を被るのが一般的である。そういえば、ここパタゴニアとバスク地方には、地理的、気候的、人種的に共通点がある。フランスとスペインの国境にはピレネー山脈が横たわり、その山脈の両側にバスク人が居住している。人種的にも言語や習慣でもスペイン人、フランス人とは異なった特徴を持つのがバスク人である。スペインでは、バスク人は働き者であるという評判が高い。

19世紀半ば以降、イタリア、フランス、イギリス、スイスなどのヨーロッパ系移民が入ってきた。とくに、南部では、ドイツ系移民を受け入れて開発を進めてきた。フロレンシアによると、最近キューバ、ベネズエラから仕事を求めて多くの移民が来ているようである。ラテンアメリカで都市中産階級の層が厚いといわれているチリだが、フロレンシアのように、非正規雇用の若ものが増えているという。また、以前は、社会保障制度がラテンアメリカ諸国の中で最も進んだ国のひとつであったが、現在では、後退しているらしい。たとえば、退職者の年金が少ない、国立チリ大学をはじめとして、大学の授業料が高い。それに比べてウルグアイやアルゼンチンの国立大学では、無料であるという。しかし、明るい顔でフロレンシアが、チリ人女性の仕事への意欲も、社会的地位も高いと、いきいきと語ってくれた。彼女自身、結婚の相手を探すよりもまず、安定した正規雇用の仕事につくことが重要であるらしい。

バスの中で彼女の席近くに座っていたので、あれこれチリの歴史、文学などをおしゃべりできて楽しかった。旅先で、つかの間であれ、素顔の現地の人たちとオープンに言葉を交わしながら心を繋いでいくのは、本当に嬉しいことである。あっという間にプエルト・チャカブコに着いてしまった。すでに昼食の時間になっていた。

船のレストランでお昼ごはんをいただいていた午後1時ごろ、つぎの寄港地、プエルト・モンへ向かって船が出港した。

夜、8時過ぎてもまだ、明るかった。夕陽は見られなかったが、西のロス・チョノス諸島の空にうっすらと、虹がかかっていた。虹と風が生まれる世界のさいはて、パタゴニアとよくいわれていたので、ぜひ見たかった虹である。パタゴニアの風景を撮った本に、パタゴニアに伝わる教えが書かれていた。<虹は自分の心の投影なので、心を真っ白にして、綺麗なものを、感謝するものを強く想うと、虹が現れることが、しばしばある。現れたら、美しい、ありがとう、と言葉をかける。そうすると、人と虹が繋がる>と.....きっと、私の強い想いが叶ったらしい。

およそ、1時間後の9時半ごろ、辺り一面、紺碧いろに染まった。海も長く横たわっている島も、空を覆っている雲も、デッキを包んでいる大気までも.....何もかも.....ゴッホの絵画によく使われているあの濃い神秘的な青。

(15) 第15日目、プエルト・モン、パタゴニア、チリ 2月13日(木)

およそ19時間かけて、ロス・チョノス諸島と本土およびチロエ島と本土との間の、比較的まっすぐに流れているフィヨルド水路を航行してきた船が、プエルト・モンの近くの鏡のような海面をすべるように前進している。まだ朝の7時前であった。ここは、チリ群島、パタゴニアおよび南極への太平洋にある玄関口であり、チロエ島への起点地でもある。ロス・ラゴス州<Región de Los Lagos一湖沼州>に属しているプエルト・モンの辺りには、その名前のおり、いくつかの美しい湖が点在している。神秘的な青い水をたたえた湖沼地帯は、世界中から観光客を招きよせている。それほど壮大な自然に恵まれた地域なのである。

プエルト・モンに面した小さな湾、いかにもどんな風からも守ってくれそうなすっぽりと半島に囲まれた Seno Reloncavi—レロンカビ湾に入った。辺りには、静寂が漂っていた。1893年まで、先住民マプーチェ語で<Bahía de Melipulli—メリプジ湾>と呼ばれていたエメラルドグリーンの水をたたえた湾である。はるか彼方まで広がっている虚空が早朝の薄オレンジ色や金いろに染まり、アンデス山脈を深い眠りから徐々に目覚めさせている。あちこちに灯り始めた明かりが、船をようこそと、いつものように、優しく迎えてくれた。ああ、今日、1日の散策でパタゴニアともお別れなのだと思うと、胸に痛みを感じた。

先記したように、ロス・ラゴス州に属した、プエルト・モンの対岸にあるチロエ島の征服が、16世紀後半にスペイン人のコンキスタドールたちにより開始された。そこには、先住民ウイリチェ族が居住していた。その島で、イエズス会神父により、どのような宣教が行われたのかをもう少し詳しく見てみよう。

#### 1) チロエ島のウイリチェ族

この島は、工芸品、織物、羊毛、木材、陶芸品、水上家屋、多数の教会群で多くの人々を引き寄せている。

1540年、スペイン人、アロンソ・デ・カマルゴがペルー遠征時にチロエ島の海岸を見つけた。1558年にガルシア・ウルタド・デ・メンドサが王室のためにこの島の所有宣言をした。1567年に、現在の州都カストロが建設され、新ガリシア (Nueva Galicia) と命名されたが、<Lugar de Chelles—カモメの飛び交う場所>となり、繁栄しなかった。

スペイン人到達の前には、本土とチロエ島の境のフィヨルド地帯には、先記のウイリチェ族が居住していた。その後、ロス・チョノス族が住んでいた南方

へと広がっていった。彼らと血縁者になったウイリチェ族（クンコ族—Cuncoとも呼ばれている、マプーチェ語を話す）もいた。このように、北方や東北の海岸、近隣の島々に居住地が広範囲に渡っていった。それにつれて、カストロ州都の南のフィヨルド地帯には、ウイリチェ族とチョノス族の混血である〈Payos—パジョス〉が住むようになった。スペイン人のコンキスタドールたちは、明らかに、上記のふたつの民族とは、文化的に異なった民族であると、考えた。先記したように、チョノス族は狩猟採集の遊牧民でダルカという小舟で島々を移動していたが、ウイリチェ族は、作付け農耕に従事していた。多数の種類のジャガイモ、トウモロコシ、インゲンマメ、マンゴ、キノア（稗に似た種子を食用）などを常に海岸の傍で栽培していた。島の内部には誰も居住していなかった。堅いルーマの木の柄で土を掘り起こしていた。リヤマ系の動物を飼育し、毛皮と肉を得ていた。また、野生の果実、海から獲れる海産物を補給していた。チョノス族から習ってカラ松の木からダルカ船を作った。その板船で内海や大陸へ広い範囲を自由に移動していた。

1608年に、イエズス会の宣教師が来島し、キリスト教布教活動を開始した。1612年に、最初の教会がカストロに建設された。それ以降、島のあらゆる場所に教会が建てられた。1767年ころには、79もあった。現在でも、チロエ島は宗教色が濃く、キリスト教の祭りが盛んである。

1712年に、ウイリチェ族がスペイン人のコンキスタドールに反乱した。スペイン人は、エンコミエンダ制でウイリチェ族を割り当てられ、労役に酷使したために、反乱が勃発した。しかし、数日後には鎮圧された。これにより、スペイン人の犠牲者は数十人にすぎなかったが、数百人のウイリチェ族が死亡した。

1767年にイエズス会神父たちが追放されて、1771年以降、フランシスコ修道会によってキリスト教の務めが果たされてきた。

チロエ島は、南米における最後のスペイン人の牙城のひとつとなった。独立



したのは、チリ国のスペイン独立から8年も経った1826年である。

19世紀は捕鯨産業が発達し、外国人、特にフランス人が多く来るようになった。また、畜産業が盛んになり、島の内部にも人が住むようになった。

20世紀には、現在では使用されていないが、一部、鉄道が敷かれて一層、島の内部が発展した。20世紀後半、チリや外国の大企業がサケの養殖を始めた。チリは、世界でもサケの漁獲高を誇っているが、その80%が、チロエ島の養殖によるものである。そして、日本はチリからサケを大量に輸入している。チロエ島はチリ国のモデルとなり、生活様式も変化していった。それにつれて、先住民、ウィリチェの生活は厳しくなっていったようである。先記の〈人類5万キロの旅、グレート ジャーニー〉の関野吉晴氏が、1993年、この地域を旅していた時に、チロエ島のウィリチェ族とアジアの会社の間で森林伐採が原因でトラブルが発生していることを知った。彼は寄り道をしてふたたび、島を訪ねてみたいと思った。というのも、その5年前の88年に、関野氏はチロエ島のコンプーという町でウィリチェのリーダーのリンコマさんに会った。彼はチロエ島に暮らしながら、先住民の権利を取り戻すための運動を長い間続けてきた。ウィリチェは、海から魚を捕って、森から薪を集めて生計を立てているが、上記の養殖のために、魚が減ってしまった。リンコマさんら先住民の生活は苦しくなっていった。

5年ぶりに会ったリンコマさんは、チロエ島の森林伐採の中止をチリ政府に求めて運動を初めていた。93年には、ウィリチェの土地を通り抜ける全長20キロの道路が作られていた。伐採した木材の輸送のためである。この時、関野氏が訪れたコンプーの町の後ろには、まだ、セルバ・フリヤ（冷たい熱帯）の森林が広がっていた。しかし、その森林も何万ヘクタールがすでにアジアの会社を買収されているという。伐採した木材を売る相手に日本を狙っているという噂があるらしい。

その後、リンコマさんたちの運動がどうなったのか知らないが、上記したよ

うに、チロエ島のあらゆる産業が発展して、チリ国のモデルになっているほどなので、チリ政府は、積極的に外国資本を受け入れていることは、たやすく想像できる。

今年（2020年）、アマゾンの森林が牧畜業のために大々的に伐採されている様子が報じられた。その森林地帯に住む反対運動を行った先住民が多数、伐採推進派によって虐殺された、と先住民の代表が悲痛な面持ちで語っていた。21世紀になっても、消滅せずに生き残った先住民の生命、生活はますます脅かされている。

## 2) プエルト・モンにおける入植の歴史

ヨーロッパ人が入ってくる前のチリの南緯30度（首都サンティアゴの北に位置するコキンボーCoquinbo 辺り）から43度のチロエ島までの広範囲に先住民アラウカノ（マプーチェ族、ウィリチェ族などの原住民の総称、拙著＜中米およびカリブ海諸島への巡礼の道、その1を参照のこと＞）が居住していた。先記のウィリチェ族はチロエ島から板船でプエルト・モンまで到着していた形跡がある。＜大地の民＞と呼ばれていたマプーチェ族は、メスティソも含めて、現在、チリ全土に120万が居住して、農業、畜産、サーモン養殖などに携わっている。最も多くのマプーチェ族が暮らす場所は、サンティアゴとプエルト・モンの間にあるテムコ（Temuco）という海浜の町である。テムコの町中では、頭にターバンを巻き、丈の長いスカート姿の女性を多く見かけるといふ。ここ、プエルト・モンにも、居住している。

サンティアゴから1024キロ離れたプエルト・モンの港を見渡せる丘の上にはいくつかの銅像が立っている。下には、太平洋が青々と広がり、陽光がきらめいている。近代的な高層ビルが、樹木の間から空へ向かって伸びている。たく

さん植えられた樹木の緑に家屋の赤い屋根が映えて美しい。洋上には、大型の白い優美な2艘のクルーズ船が並んで碇泊している。一艘は私の乗ってきたクルーズ船である。

丘の銅像の向かい側には、瀟洒な色とりどりの家々が建ち並んでいる。壁には、この地特有のうろこ模様がほどこされている。夏は涼しく、冬は暖かいという機能性がある。デザインも目を惹くように美しかった。海老茶いろの壁に白い窓枠の家、上半分は緑いろ、下半分は青に塗られている家、あるいは、上は白、下は海老茶いろの家など、遊び心がいっぱいであつた家と家との調和があつていて、とてもセンスがいい。これらの住まいはドイツ風なのであろう。ヨーロッパから来た移民の中で、ドイツ出身者がいちばん多いプエルト・モンの町なのである。

銅像を丹念に1つひとつ見ていくと、プエルト・モンの移民の歴史がよく理解できる。ヨーロッパ風な衣服をまとった4人家族の像に向かい合っているのは、ひとりの先住民の若もので、短いマントを羽織っている。肩には、棒きれのようなものを担いでいる。足元には、飼い犬が座っている。つぎのような説明が鉄の銘板に彫られている。<1852年—2002年、ドイツ人移民者を記念して。最初の家族が、1852年11月28日、この地に、“スサンヌー Susanne”という船で着いた。プエルト・モンの町に寄贈、ドイツのクラブより>

このように、1852年以降、チリ政府はヨーロッパ系移民、とくにドイツからの移民を南部に受け入れて、開発を進めてきた。この像から分かるように、プエルト・モンには、アラウカノの先住民が居住していた。スペイン人のコンキスタドールに激しく抵抗してきた南部のマプーチェ族は、1880年代には、おおかた消滅した。

つぎの銅像は、制服姿のトルソである。べつたりと、赤と白のペイントが両眼に塗られている。先記の銘板にも、黒のペイントでいたずら書きがされていたが、意味はわからなかった。どこかの先住民の言葉だとは、思う。歴史的な敗

退の事実を否定したい者がささやかな抵抗を試みているのであろうか。

トルソの銘板によると、〈町の建設者、ドン・ビセンテ・ペレス・ロサレス。没後、百周年を記念して、プエルト・モン市 1986年9月6日〉 プエルト・モンの建設者だと分かる。この銘板の建設者および名前の上にもピンク色のペイントが塗られている。他の銘板にもつぎのようにロサレスの名誉がたたえられている。〈植民地建設者ドン ビセンテ ペレス ロサレス、およびプエルト・モン市の建設者。1853-1970年2月12日 歯学研究員協会 この市で開催された8回目の国内学会を記念して〉

スペインのコンキスタドールたちは、チロエ島から近いこの町に、入植しなかったようである。攻撃的なアラウカノがいたせいかもしれない。上記のように、1852年にプエルト・モン市に最初のドイツ人が到着した。これは、当時のマヌエル・モン（Manuel Montt）大統領によって推進された政策によるものである。チリ南部の今まで未開拓で有効に使われてこなかった土地に国内経済発展のために、ヨーロッパ人を入植させることになった。特に、積極的にドイツ人を受け入れた。隣国のアルゼンチン人作家、ボルヘスのエッセイ（続審問、〈1944年8月23日に対する註解〉）を読んで気がついたが、アルゼンチン国民もドイツ民族を崇拝していた。後に、ドイツでナチスが台頭した時期には、多くの熱狂的なヒトラー支持者がでたようである。南アメリカにおける別の顔を見たおもいかられた。戦後、アルゼンチンが、逃亡してきたナチスの残党を多く受け入れたという過去の歴史が自然に思いだされた。

さて、先記の移民政策にかかわったひとりが、すでに述べたビセンテ・ペレス・ロサレス（Vicente Perez Rosales）である。この中には、ドイツ人も加わっていた。こうして、1853年2月12日、メリプジーMelipulli 湾岸に町が建設された。町の名前はモン大統領に敬意を表してプエルト・モンと命名された。

19世紀後葉から20世紀中葉まで、境界にあるアルゼンチンの町と緊密な商

業的なつながりを持ち、境界の両側にドイツ人が入植するようになった。しかし、それ以降は、境界の警備が厳しくなり、だんだん両国のつながりが消滅していった。

良好な海洋条件にもかかわらず、プエルト・モンは、港としては、1930年代までは発展しなかった。埋め立て工事などをして開港したのは、1934年であった。防波堤が鉄道駅まで延びて、長い海岸線に沿って町が作られた。開港により、プエルト・モンは、チリ南部における重要な海洋拠点としてアイセン州および他の州と海上のつながりを深めていった。

1960年のプエルト・モンの北方の隣の実濱町の大地震により、およそ70%のプエルト・モンの建物が破壊された。改修不能や居住不可能となった。より低地が酷いダメージを受けて、港、沿岸地域、鉄道駅などが大きな影響を受けた。この大災害により、プエルト・モンの町、州は高所に向かって発展していった。丘の上に多数の住宅が建設されるようになった。今、私がいる丘の住宅街がそのひとつである。先記したように、遠くまで太平洋の水平線が眺望できる素晴らしい場所である。ここの居住者は、外国の大型クルーズ船をキッチンの窓から眺めるたびに、世界へ旅する夢をかきたてているのではないだろうか。かつて、私が旅先のリスボンやバルセロナの港で停泊していた威風堂々とした大型クルーズ船を憧れの眼で眺めていたように.....今でも、しばらくの間、その前に佇んで、いつかは私も.....と夢をふくらませていたことを懐かしく思い出すことができる。

1990年代には、チリは養殖のサケの輸出量がノルウェーについて第2位になった。現在では、サケだけではなく、ウニ、アワビなどの養殖も盛んである。

21世紀もプエルト・モンは、漁業、養殖、農業、畜産、交通、通信、観光などチリ南部の経済の中心地である。20キロほど北にある湖岸のリゾート地、

プエルト・バラスには、公共の住宅がたくさん建設されて、プエルト・モンの住宅不足を補っているし、ホテルの数もこちらのリゾート地のほうが多い。

今から、プエルト・バラスをとおってチリの富士山と呼ばれているオソルノ山が目の前にそびえ立つペトロウエ滝までドライブをしよう！

### 3) バラと火山の町、プエルト・バラスおよびペトロウエ滝へのドライブ

9時半ごろ、プエルト・モンを出発したバスが北へ向けて走っている。透明な青い空と風の中、両側の車窓の平原、牧草地もどんと走り去っていく。ふたり目の30代のチリ人の男性ガイドが、ふわふわした綿毛のような白い花を咲かせている樹木は、この地帯特有のウルモの木で、蜜が採れると、教えてくれる。しばらくの間、その花の樹は目を楽しませてくれた。しばらくして、プエルト・バラスの郊外の住宅街が見え始めた。19世紀半ばころにドイツの移民によって造られた家々は、こじんまりとして、簡素であるが、いかにもドイツ人の住まいのようにきちんと整っていた。十数年前に訪れた古城のあるドイツの街並みが自然に思いだされた。時期ならば、家々の生け垣には、色とりどりのバラが美しく咲き誇っていたであろう。プエルト・バラスは、〈バラと火山の町〉として讃えられている。ドイツ国民はバラの花が好きである。ヘッセの詩やエッセーから、それが読みとれる。だから、バラは、ドイツ移民にとって追憶のシンボルなのだと思う。バラの甘美な香りは、限りなく遠くにある母国への郷愁をかきたてるのではないだろうか。どんな理由であれ、生まれた国を捨てて、遠いよその土地へ住むという移民の心情には、他者には、はかり知れない深遠なものがある。そんな時に、微かに漂ってくるかぐわしいバラの香りは、彼らを追憶の道へと連れていってくれるのである。同時に、異国のここが終の棲家であるという憂愁の思いをバラから嗅ぎとっているのではなからうか.....

プエルト・モンで出会った初老のドイツ人男性は、スイスのようなこの風光明媚なこの地に数十年、居住しているが、とても満足していると、にこやかに語ってくれた。

左の車窓に、小高い丘に建てられたカトリック教会が視界にとびこんできた。とおりに過ぎてからネオクラシック建築だと、教えられた。この地域は、今もドイツ文化が息づいているという。本国ドイツはプロテスタントの割合がカトリックより少し多いが、チリはおよそ90%がカトリックである。＜郷に入っては、郷に従え＞の諺どおりカトリック教徒になったのか、カトリック教徒の移民が入ってきたのか、分からない。ドイツ料理を提供するレストランも多いらしい。サケ産業で栄えているプエルト・モンから取り寄せるサケや魚介類の地元の料理も、もちろん人気が高い。

やがて、バスはジャンキウエ湖畔に停車した。この湖水地帯にいくつもある湖の中でいちばん大きい湖で、琵琶湖のおよそ3倍あり、氷河で造られた。対岸にオソルノ山（休火山、2661メートル）、カルプーコ火山（2015メートル）が望まれた。＜バラと火山の町＞と呼ばれているその火山である。湖水は淡い朝の光に輝いて透きとおるような青である。そして山も空もそれにもまさる青であった。まさに、このような湖岸の山々を遠望するという情景は、スイスのモンタニョーラに住んでいた先記のヘルマン・ヘッセ（ノーベル文学賞作家、ドイツ、1877-1962年）が自分の庭から毎夕、（スイス側にある）サルヴァトーレ山のかなたにある（ルガーノ湖岸にそびえ立つ）イタリアの山、モンテ・ジェネローゾがバラ色の夕映えに包まれているのを見ていたという描写をよみがえらせた。晩年のヘッセは＜湖と、山と、空の青……＞をいつも眺めながら、広々とした自分の庭に植えた草花、樹木、果樹などの庭仕事を愉しんでいた。そればかりではなく、＜土と植物を相手にする仕事は、瞑想するのと同じように、魂を解放させてくれるのです＞と述べているように、文学者らしい深い想

いをめぐらしながら生命の秘密、自然と人生の真理にまで到達していく。私の目の前に広がる夢と神秘の青色の風景をヘッセのように、ひとりきりで、静寂の中で毎朝、毎夕、季節の変化を感じながら、眺めたら.....

スイスのようなこの光景を目の当たりにしたとき、ここに初めて到着したドイツ人移民はどんな感慨に浸ったのであろうか.....

カルブーコ火山が噴火した時、このジャンキウエ湖まで溶岩がきたと、ガイドの声が聞こえてきて、はっと現実の世界に戻った。

まもなく、ここから、東へ1時間弱のところにあるトドス・ロス・サントス湖畔（Lago Todos Los Santos）のペトロウエ滝に向かって、バスが出発した。

左側の車窓にくっきりと映しだされたのは、柔らかい稜線を左右に伸ばしたオソルノ山であった。1年中、山頂に雪をいただいている優美な姿は、富士山をひと回り小さくしたようで、親近感があった。右手には、チリとアルゼンチンの国境の上を縦断しているアンデス山脈の山なみのどこまでもつづく稜線が望まれた。車道の両脇には丈の低い色鮮やかな緑の樹木がびっしりと植えられていたので、ジャンキウエ湖畔に沿って走っているバスから湖は見えなかった。

<ペトロウエ滝へ ようこそ、ピセンテ ペレス ロサレス 国立公園>という看板から歩き始めた。プエルト・モンの建設者のロサレスの名前を冠した国立公園である。このあたり一帯は、南アメリカに人類が足を踏み入れる、今からおよそ、2万2千年前に形成された。その後、オソルノ火山が大噴火した。その溶岩が、当時、辺り一面をおおっていた氷河の下に浸透していき、速いスピードで溶岩が冷却されていった。その後の何回かの噴火により氷河が後退していった。あちこちに溶岩が現在の奇形としかいいようのない形体に凝固され、その間をペトロウエ川が勢いよく流れて、滝となった。先の看板の横にある案内板に書かれていた説明の要約である。



オソルノ山の噴火の凄さを語っているように、広範囲に溶岩が散らばっている。粗削りな溶岩の狭いすきまを上から下へ水しぶきを立てている滝や、エメラルドグリーンの渦を巻きながら流れているペトロウエ川は、雪を被ったオソルノ山を背景にして、自然がつくりだした複雑で珍奇な、それでいて魔力を秘めた美しさを見せていた。このような長〜い年月をかけて作りだされた自然の形象は、たくさんの旅人を引き寄せ、魅せる魔力があるのだと、思わせてくれた。幼い子どもの頃から自然の独特な魔力や深い言葉に没頭してきたヘッセは、つぎのような文学的な深遠な省察をしている、<.....私たちは自分たちと自然とのあいだの境界がゆらぎ、溶けてしまうのを見、私たちの網膜に映るさまざまな形象が外部からの印象によるものか、それとも私たちの内部から生じたものかわからないような気分になる。>.....と。

人工的に短期間に作られたどんな作品よりも、何万年もの長い年月をかけて神的に創造されてきた複雑に錯綜した自然の景観の前で、しばらくの間、動けずにいた。

プエルト・モンから海辺に沿って西へおよそ2キロいったところに、アンヘルモ (Angelmo) という漁港がある。そこには、地元の人々や旅人で賑わい、活気にみちた市場がある。新鮮な魚や貝、アワビ、ウニ、カニなどを手頃な値段でたくさん食べさせてくれる食堂が軒を連ねている。そのうちのひとつの大きな食堂でサケのステーキをいただいた。いつも、日本で小さなサケしか食していない私は、3倍ぐらい大きく、水揚げしたばかりの新鮮なサケに感動した。しかし、もったいない話のだが、半分ほど皿に残してしまった。サケの他にも地元の珍しい野菜をいっぱいいただいて、満腹してしまったのである。それに、毎日のように、地元の食材を豊富に使ったごちそうをいただいているために、大盛りの料理皿を見ただけで、お腹が満たされてしまうのである。

港まで、みやげ物店がずらっと軒を連ねている細い路をゆっくりと、ここにしかない品物を探しながら、歩いていくと、棧橋から少し離れた場所にクルーズ船が停泊しているのが見えた。

ガイドのラファエルと道みち、おしゃべりしながら分かったのは、チリの若い夫婦の結婚についての自由な考え方である。彼自身、2児の父親なのに、妻とは性格の違いというごくありふれた曖昧な理由で離婚している。子どもを引き取っている元の妻の近くに住んでいるので、子どもとは、よく会っているようである。彼女は、教師でしっかりした性格らしい。先記したように、チリには、ヨーロッパの移民が多いが、彼女のどちらかの親はイタリアからの移民である。ラファエルが彼女と知り合ったのは、ふたりとも旅行で訪れていたイタリアであった。彼らだけではなく、最近では、20代、30代の離婚率が高いそうである。子どもを妻のもとに残して夫が家を出て行くケースが多いという。ラファエル自身がそうなのである。どことなくロマンチックで、甘い風貌の彼に惹かれる女性が、少なからずあるのであろう。完璧に話す英語は、カナダでウェ이터をしながら習得した。いつか、日本へも行きたいというラファエルは、まだまだ、放浪の憧れ、異国への旅の渴望がある。妻のように定職を持ち、家に腰を落ち着けるタイプではなかったようである。

薄墨いろのいちめんの雲のところどころの隙間に、やわらかな何本もの金糸が見える夕方の6時ごろ、船はつぎの最終寄港地へ向けて出航した。母のふところにゆったりと抱かれているような大海原から、あと少しでお別れするのかと思うと、本当に寂しかった。2月1日にブエノスアイレスで乗船したのが、まるで昨日のように感じられた。まるまる2週間は船に揺られていたのに.....

(16) 第 16 日目 サンアントニオ港 (チリ) へ終日、太平洋クルージング

2 月 14 日 (金)

サンアントニオ港は、陸路で目的地のバルパライソ (チリ) へ行くために下船する乗り継ぎのための港である。太平洋は終日、穏やかであった。雲ひとつない限りなく真っ青な大空と大海原が水平線のかなたまで広がっていた。午前中は、翌朝の下船のための準備にかかりきりであったが、昼食の時間よりかなり前に、片づいてしまった。ここで、バルパライソまで来たスペイン人遠征隊や現在のチリを建設したスペイン人のコンキスタドールの物語を退屈しのぎに船に揺られながら語ることにしたい。

スペイン人のコンキスタドール、ディエゴ・デ・アルマグロ (Diego de Almagro, 1480?-1538) は、ペルーに金が豊富にあるという情報を掴み、1520 年代、フランシスコ・ピサロ (Francisco Pizarro, 1475 ごろ-1541) と組んで、ペルー遠征計画を企てた。遠征は成功し、最終的に、1529 年、ピサロがペルー総督に任命された。1533 年、インカ皇帝アタワルパを処刑した。わずか数年で強大なインカ帝国は滅ぼされたことになる。その後、帝国の都クスコを占拠した。1535 年にスペイン人居留地との接触がとりやすい海岸地方にある現リマ市に、〈諸王の都 Ciudad de los Reyes〉を建設した。

一方、アルマグロはピサロとともにクスコに進撃し、占拠した後、1534 年、500 名の部下を率いてチリ遠征を企てた。ペルーの〈インカの道〉をたどり、4000 メートル級のアンデス山脈を越え、襲撃してくる原住民と戦いながらの遠征は厳しかった。ついに、1536 年、遠征隊はバルパライソに到着し、この地を〈天国のような谷—バルパライソ Valparaiso〉と命名した。そこから南の方へ探索を続けたが、目的の黄金を発見できなかった。この寒冷で痩せた土地には、何も期待できなかった。しかも、マプーチェ族 (アラウカノ) の攻撃

は激しかった。クスコを統治するためにペルーに戻ることにしか考えられなかったアルマグロは、帰路には、アンデス山脈ではなく、チリ北部に広がっているアタカマ砂漠に行くことにした。昼は猛烈な暑さで行軍できずに、夜間に数キロずつ進み、同年 1536 年、クスコに戻ったが、アルマグロはこの遠征で全ての財産を失った。ほうほうのていで帰還したアルマグロ一行を目撃したスペイン人たちは〈Rotos de Chile、チリのせいで破滅した人たち〉と彼らを嘲笑い、4 年後にペドロ・デ・バルディビアがチリへ遠征するまで、誰も行こうとはしなかった。クスコに戻ったアルマグロは、そこの管轄権などをめぐってピサロと対立した。そして、ピサロとのサリナスの戦いで敗れ、1538 年ピサロに処刑された。これをきっかけにして、スペイン人どうしの内乱が始まった。勝利したピサロは、3 年後の 1541 年に、アルマグロの遺子に暗殺され、ペルーはますます混乱を極めていった。

北は広大なアタカマ砂漠、南は氷河の広がるパタゴニア地方、東には南北アメリカ最高峰のアコンカグア（6960 メートル）がそびえ、西には滔々と流れる大海原の太平洋。ペルーからチリへの遠征は、いずれのルートを取っても、苛酷な大自然が待ち受けている。その自然に囲まれている細長いチリのほぼ真ん中に位置する首都サンティアゴの標高は 520 メートルある。そのサンティアゴを建設したのが先記のペドロ・デ・バルディビア（Pedro de Valdivia, 1497-1553 年）である。ほとんどのコンキスタドールたちが辿った苛酷な運命を上回る壮絶といってもよいそれをバルディビアは文字通り一身に引き受けた。

バルディビアが新大陸に初めて足を踏み入れたのは、1534 年だった。出身地は、ポルトガルとの国境ちかくにあるスペイン西南のバダホス県ビジャヌエバ・デ・ラ・セレーナ。

1535年、ペルーのピサロ軍団に加わり、ピサロから厚い信頼を得た。先記のサリナスの戦いで、アルマグロを敗走させたピサロの勝利に貢献した。

1540年、200名のスペイン人および千人ぐらゐの原住民を引き連れてクスコを出発した。全てのスペイン人のコンキスタドールが避けたチリ征服の開始である。アルマグロの敗退、現地のアラウカノ族の野蛮さについては、いまだに、誰もが鮮やかに記憶していた。この状況下でのチリ征服の遠征を強行したバルディビアは、一般的なスペイン人のヴァイタリティ、狂暴さ、血なまぐさ、血の騒々しさ、熱望などを持ち合わせていたと、思われる。こうしたスペイン人の本質的な性格を理解しないと、新大陸における征服への情熱、狂気を理解できないであろう。ある著名な評論家は、ピカソの絵画が分かるためには、スペイン人をまず、分からなければならないと述べている。

アンデス山脈やチリ北部の標高2700メートルのアタカマ砂漠をとおり、陸路で1年、進行した。難儀を極めた行軍であった。ちなみに、チリで最も古い町、サン・ペドロ・デ・アタカマには、バルディビアが建てたというチリで2番目に古い建物、カサ・インカイカ (Casa Incaica, 現在あるのは、18世紀のもの) がある。

さて、先記のアタカマ砂漠についてであるが、その砂漠の中には、世界最大級の銅山がある。それを見学したチェ・ゲバラが南米旅行日記で、その乾燥した砂漠を2時間ばかり歩いた時の辛さをつぎのようにいきいきと語っている、  
<.....僕らは思慮もなく足を踏み入れてしまい、.....岩肌がむき出しになったアンデス山脈の途方もない孤独感と、頭の真上からまっすぐ照りつける太陽と、.....ナップサックの重みで、僕らは現実に目が覚めた。.....持っていた1リットルの水はすぐに飲んでしまって、日が暮れる頃にはのどもからからで、すっかりまいってしまって.....>。アルゼンチンから出発したチェは、バルディビ

アの南下とは反対にペルーに向かって北上している。

アタカマ砂漠が終わりかけているチリ北部のイキケ（Iquique, 太平洋岸の港町。19世紀、硝酸塩の積出港として繁栄した）と、ペルーとの国境ちかくにある港町アリカ（Arica, スペイン植民地時代には、ボリビアのポトシで産出された銀がアンデスの山々を越えてヨーロッパへ運ばれていった。ペルーとボリビアとの国境にあるチリの陸の玄関でもあり、両国との行き来の拠点）の間の距離は、304キロメートルある。

バルディビア一行は、ペルーからアリカをとおってチリに入ったと思われる。チェはその間を何台ものトラックに乗せてもらったり、徒歩で横切った。その旅の苛酷さをバルディビア一行を評しながら、つぎのように、語っている、<イキケとアリカの間の長い道のりは、登りと下りの連続で、.....完全に乾ききったこちらのパンパでは、昼間は非常に蒸し暑く夜になるとかなり冷え込むが、.....バルディビアが、少数の部下と一緒に、一滴の水も、最も暑い時間帯に逃げ込む灌木すら見つけることなく、50キロも60キロも進んでこんなところを横切ったのだと考えると、本当に感心させられる。あの征服者たちが通っていったという場所がどういうところか知っていれば、バルディビアとその部下たちの偉業に対する評価はいきおい高くなるのであり、スペイン人による植民地化の中でも最も特筆すべきものの一つで、アメリカ大陸の歴史に残る偉業の中でも疑いもなく最も素晴らしいものであるとさえ言える。.....彼は、人類がときどき生み出すそういう特別な人種に属しているのであって、彼らは時に無限の権力というものを潜在的に切望しており、その欲望のせいで、権力を手に入れるための苦痛なら全て当然のものだと思えるのだ。>。

あのチェ・ゲバラがこんなにもバルディビアを賞賛しているのは、この砂漠地帯を徒歩で横切った時の苦痛を自身が体験したからである。まだ、20代前半の若ものであったゲバラが難儀した場所を、40歳を少しこえたバルディビ

アは、常にアラウカノ族、その他の原住民の襲撃に警戒しながら重い甲冑で武装しながら進んでいった。ゲバラが指摘しているように、バルディビア遠征隊の苦行は、他のスペイン人のコンキスタドールたちと同じように、征服のために流した汗を黄金に変えたい、豊かな王国を支配したいという熱望によるものなのであろう。

〈中米およびカリブ海諸島への巡礼の道〉(その1、2、3、新井藍子、参照のこと)で述べてきたコンキスタドールたちも、バルディビアと同じような苦難の道を歩んできた。たとえば、メキシコから中米のグアテマラへ陸路をとり、峻嶒な山々や湖をとおってきたアルバラード隊長が率いる遠征隊。中米ニカラグアの旧レオン市を建設したフランシスコ・エルナンデス・デ・コルドバ。中米コスタリカの統治者として多くのスペイン人を入植させたファン・バスケス。バスコ・ヌニェス・デ・バルボアは、熱帯雨林に潜んでいる数々の原住民たちを少数の部下とともに何度も敗退させ、峻嶒な山々を上ったり下ったりしながら太平洋を発見した。4カ月間、カリブ海沿岸を遠征してコロンビアを発見し、サンタ・マルタの港町を建設した大海原のベテラン、ロドリゴ・デ・バスティーダス。そして、コロンビアの首都であるボゴタを建設したヒメネス・デ・ケサーダは、エル・ドラド探しに憑かれたひとりだが、発見できなかった。まだまだ、枚挙にいとまがないほどあまたのコンキスタドールたちが狂気に憑かれて新大陸へ遠征した。そして、成功しても、たいていのコンキスタドールたちが最後は、非業の死をとげている。後でみるバルディビアもその例外ではない。海で遭難したり、原住民に殺されたり、ライバルのスペイン人から処刑されたり、部下たちによって謀反を起こされたりしている。それでも、スペイン人に流れている騒がしい血と激しい情熱によるものとしか考えられない、大航海時代のスペイン人たちは、艱難辛苦をものともせず、新大陸へ向かったのである。

バルディビア一行に話しを戻すと、クスコを出発してから、およそ1年後の1541年2月12日にマポチョ川（Rio Mapocho—サンティアゴの町を横切っている川）近くにある高さ70メートルほどの丘、サンタ・ルシアに要塞を築いた。何回もアラウカノおよびアコンカグア、マポチョなどの他の原住民の襲撃を受けて、激しい戦闘が繰り返された。生き残ったスペイン人や一緒に連れてきた先住民たちは食料不足でしばしば飢餓状態に陥った。巧みな剣つかいと同様にバルディビアは、巧みな筆でつぎのような手紙をカルロス王にしたためた、  
<戦闘には、兵士は耐え忍び、死ぬのも名誉であるが、飢餓に耐えるには、人並み以上に強くなければならぬ> 空腹は、小麦の栽培や動物、小鳥などを捕まえてどうにかしのいだ。

他のスペイン人軍団は去ってしまったが、バルディビア軍団は、ひと筋縄ではいかぬ苛酷なチリの大地に鉄の覚悟で残った。日中は、武装しながら畑を耕し、夜間は、半数以上が警備にあたった。広場の周囲にめぐらした3メートルの高さの防衛壁は、レンガにより強化された。その広場の中には住まいがあった。広場の高倉からは、ぐるっと遠方まで見渡せた。そこは、また、栽培された食料を貯蔵したり、原住民の叫び声が聞こえるたびに逃げ込む場所にもなった。騎馬兵たちは外に出て、原野を駆け巡り、彼らと戦い、食料品を守った。バルディビアはできるだけ黄金を集めて器、剣とその柄、あぶみなどを造り、商売に励んだ。

バルディビアが、1542年に救援に送った数名の兵士のうち多数が、ディアギータ族に襲われて殺害されたり、囚われたりした。無事に3か月後に脱出できたのは、アロンソ・デ・モンロイ（Alonso de Monroy）とペドロ・デ・ミランダのみの2名の強者であった。

1543年、サンティアゴが火攻めにあった2年後にバルディビアが切望していた救援の船がバルパライソに着いた。証人によると、<気性の荒い征服者が涙を滝のようにあふれさせて、ひざまずき、両手を天に伸ばして神におおいな



る感謝をした。こんなにも苦難の中にいる彼とスペイン人を思いだしてくださったことを.....>。

同年の12月、疲れを知らぬモンロイが70名の騎馬兵の一群を連れて戻ってきた。信心深いカトリックのバルディビアは、常に苦境のこれらの時期に心からすがっていた、スペインから持ってきた小さなマリア様像を鞍につけていた。彼は、もし、モンロイ中將が救援者を連れて戻ってきたら、マリア様を祝福するための礼拝堂を建てると誓いをたてていた。その礼拝堂が、現在のサンティアゴにあるサン・フランシスコ教会である。今でも、小さなく救援のマリア様像>がその教会の主祭壇に祀られている。そのマリア様像が、チリ揺籃期の唯一の遺物である。そのせいか、他の教会と比べて、この教会には、いちだんと重厚で荘厳な雰囲気漂っているという。

サンティアゴにおける植民地が再強化されたのを見たバルディビアは、より南方への征服の計画を推し進めた。モンロイが連れてきた救援兵士も、200名に増えていた。マゼラン海峡に向かって王室の許可を得た他のスペイン人征服者たちの船を見かけたという先住民の知らせにより、バルディビアはすぐにも出発を望んだ。しかし、モンロイとミランダがペルーに救援を求めて出発した時に直面した危険なルートをより安全にするために、他の港町を建設することが優先された。

それが、1544年、サンティアゴの北、およそ470キロメートルに位置する太平洋に面したラ・セレナ (La Serena) の町である。ペルーにより近くなったのである。バルディビアの出身地名を冠した町は、植民地への最初の1歩を踏み出した。灼熱の北部砂漠地帯から抜けて肥沃な中部地帯へ入るちょうど境界に当たる。1年を通じて気候は温暖で冬でも零下にならない。もっと南方への探検のために援助を切望していたバルディビアは、カルロス王に宛てた手紙の1通には、少々、誇張されてはいるが、王の興味を引くためにラ・セレナの

町の快適な情景が書かれている。その部分を要約してみると、<..... 商売人もだれでもこの地に定住したいという者がいるということをお知らせします。それほど、ここは、この世でいちばん住みやすい所なのです。その理由は、まったくの平野なので健康的です。4カ月の冬の期間でも、雨が少なく、心地よい太陽の日々が続くので、暖を取る必要がありません。夏は、それほど厳しい暑さではありません。快適な風が吹きわたり、人は1日中、散歩を愉しめます。牧草や畑が豊かなので、どんな家畜でも飼育できるし、どんな種類の野菜でも栽培できます。住居を建てたり、薪にするための木材が豊富にあります。金の鉱山が豊かにあります。全ての土地から金が産出されます。神様がわざわざ、これら全てを所有できるように、近くに配置して下さったのではないかとまで、思われます。.....>。

ペドロ・デ・バルディビア、ラ・セレナ、1545年9月4日

セレナの土地についての意図的なあまりにも誇張されたこのような描写は、サンティアゴの巷では、皮肉をこめて<昔の冬のこの町の暖房は、ドン・ペドロ・デ・バルディビアの手紙を読むためにのみ役立っていた。チリには寒い冬がないそうだから>と、はやしたてられていた。

パンフレットのこの手紙は、王室が、遠征を拡大している忠実な臣下をこのように素晴らしい王国の総督に任命するように、本国のスペイン人たちにも探検に来るように、そして、サンティアゴとマゼラン海峡の間にある広大な未開の大地に居住するように、と一生懸命誘いかけていた。或いは、5年間滞在しているチリという国に愛着心がわいて、たぶん、バルディビアには欠点が見えなかったのかもしれない。

バルディビアは1547年、F.ピサロの弟、ゴンサロ・ピサロの反乱を鎮めるために、ペルーへ戻った。G.ピサロは、王室の政策に反対し、公然と反乱を

起こしたのであった。鎮圧の目的を果たしたバルディビアはチリに帰ってきた。この功績により、チリ総督として、正式に認められた。

その後、南方へ遠征を続けた。1550年、現在の港町のコンセプション(Concepción—南緯37度)まで到達できた。思いだしていただきたいが、1519年にマゼラン隊は、世界一周航海を開始し、1520年には、南緯39度以南のパタゴニアに到着した。しかし、この航行後は、少数のヨーロッパ人による探検は試みられたが入植は進まなかった。

入植の目的でバルディビアはコンセプションの南方へ遠征を続けた。1553年、南のピュレン(Puren)要塞、コンセプションの北の要塞、そして、テュカペル要塞(Tucapel, コンセプションの西のビオビオ河口に位置する)を建設した。

アラウカノ族の反乱が勃発した。ラウタロ(Lautaro)により統率された反乱は、その中でも、最もすさまじく、戦略的に巧妙なものひとつとなった。密使によりバルディビア一行が南へ向かったことを知ったラウタロは、スペイン人遠征隊が必然的にテュカペル要塞を通ることが分かり、計略を練った。同年12月中旬、コンセプションを出たバルディビア一行は、アラウコ要塞へ向かった。アラウカノ族(マプーチェ)のスパイが丘の上から軍団をずっと追跡していた。そして、行軍を続けさせるために戦闘をしなかつた。バルディビアは、すでに部下を偵察に放っておいたテュカペル要塞から何の知らせもないことや、先住民のしかけがないことを奇妙に感じ始めていた。時々、かなり遠方にちらほらと彼らの姿が見えた。バルディビアは数人のスペイン人を再び、偵察に放ったが、戻ってこなかった。その夜は、テュカペル要塞の手前で野営した。

翌25日、早朝に出発した。要塞の近くまで来た時、あたり一面、不気味な静寂に包まれていた。バルディビアは不審に思い、そこに近づくと、要塞は完

全に破壊され、部下たちの姿も見えなかった。煙を上げている要塞で野営をしようと、バルディビア一行が準備を始めた時だった。突然、密林の闇の奥から叫び声があがり、一群がスペイン人に向かって襲いかかってきた。熟練の軍人のバルディビアが率いる前衛隊は、防衛に努め、後衛の騎兵はマプーチェに猛攻撃していた。一度は、森へ先住民を後退させることができたが、2度目に、彼らは、槍、ハンマー、投げ玉や投げ縄により、騎兵たちを馬から落下させ、頭を何回も叩き割った。3度目の攻撃はラウタロにより始まった。騎兵隊長は、最後まで戦うことを提案したが、これ以上の無駄死にを避けたかったバルディビアは、退却を決定した。そして、ほとんどの者たちが退却中に殺され、バルディビアは捕らえられ、数日間の残虐な拷問により息絶えた。

その後、何回もチリにおけるスペインの植民地は、戦いに勝利したマプーチェ族に襲撃され、チリ南部にあるコンセプションはもっとも襲撃を受けやすい町として略奪され、放火された。<Yo soy Lautaro, que acabe con los españoles; Yo soy el que los derrote en Tucapel y Yo mate a Valdivia. 俺はラウタロだ、スペイン人を始末した;テュカペルで彼らを破ったのは、この俺だ、俺がバルディビアを殺した>というラウタロの有名な言葉が残されている。コンセプションの独立広場には、マプーチェの大地の解放者としてのラウタロの像がある。先住民の子孫たちにとっては、ラウタロは、未来にほのかな希望の光を放つ理想像なのである。

当時のチリ植民地のスペイン人たちがラウタロへ抱いた危機感と復讐の企てにより、バルディビア総督の死後4年目の1557年4月、フランシスコ・デ・ビジャグラ隊長 (Francisco de Villagra) は57名の騎兵、5名の火縄銃兵および400名以上のヤナコーナ (植民地時代にコンキスタドールに仕えたインディオ) を引き連れてラウタロ討伐に南へ向かっていた。その情報を得て、サンティアゴは、守備がおろそかになるであろうと考えたラウタロは、反対に北へ

向かった。

30日未明、ラウタロはマプーチェ砦で800名の部下とともに野営していた。スペイン人討伐隊はもっとかなり遠方にいると思っていたその日は、砦に歩哨がいなかった。すでに、密偵によりラウタロの寝室の場所を知っていたビジャグラ隊長は、鳴らされていた突入の太鼓で騒ぎだしたマプーチェ族の中をまっすぐ進み、扉ごしにラウタロの体を一突きで刺した。ラウタロの手にはバルディビアの有名な愛剣が握られていた。こうして、壮絶な死を遂げたバルディビア総督用いのための復讐が果たされた。しかし、ラウタロという類まれな統率者を失った後でも、マプーチェ族は5時間以上、勇敢に戦い続けた。最終的に、死者は663名で、130名が逃亡した。アラウカノによる数多くのうちのひとつの激戦で、数人の優れたカシーケのうちでも戦略にかけて特筆すべきひとりのカシーケ、ラウタロがここに、消え去った。

先記した1550年にバルディビアが建設したコンセプションの町は、西にピオビオ川河口(Biobio)がある。1546年にバルディビアがピオビオ川の岸辺に、より南方の征服を目指して、野営していたときにマプーチェ族の襲撃を受けた。ここは、マプーチェ族が住んでいた土地で、彼らによるスペイン人への第1回目の襲撃であった。ちょうど、スペイン人植民地とマプーチェ族の土地の境目にあるコンセプションは、対インディヘナ用の要塞が、後に町に発展したものである。植民地時代における1565年から1573年にかけて、チリ王国の首都であり、軍事的、政治的拠点であった。先記のフランシスコ・デ・ビジャグラが復讐を完遂した後も、マプーチェ族の攻撃は収まらず、住民の流出や再入植をくりかえしていた。やっと、安定し始めたのは、反乱軍の優れたカシーケ、カウポリカン(Caupolican)が処刑されてからである。しかし、完全に鎮圧することはできず、彼らの抵抗は19世紀まで続いた。

1589年、スペインの詩人、アロンソ・デ・エルシージャ(Alonso de Ercilla,

1533～1594年）は、かの地にしばらく滞在して、8行詩による叙事詩「ラ・アラウカナ」3部作のうちのある部分を執筆した。アラウカノ族の勇猛果敢な戦闘、およびコンセプションの当時の様子を赤裸々に語っている。

1818年、コンセプションの独立広場でスペインからのチリ独立が高らかに宣言された。沿岸の山脈のふもとにあるチリ中部のコンセプションは、今日では、サンティアゴ、バルパライソについて重要な産業都市である。また、ここには、いくつかの名門大学がある。1960年代、および軍独裁政権下では、左翼革命運動がコンセプション大学から生まれた。権力に激しく抵抗するアラウカノ族の血が、今でもこの土地の人々に流れているような思いがする。

ひたすら船は、バルパライソおよびサンティアゴに向かって北上している。

ざっとだが、およそ500年前以上のチリ王国の建設、マプーチェ族の大地における壮絶な闘いなどを勉強するかたわら、デッキに出ては、新鮮な空気を胸いっぱい吸いこんだ。後ろ右舷には、航跡が白い波を立てていた。南太平洋は夢のような紺青色で、おおらかで、のどかであった。それより薄い水色の透明な空が水平線の上に目のとどく限り広がっていた。

いつまでも夏の日は暮れようとしなかった。まわりを赤やオレンジ色に染めながら、真っ黄色の光輪をまとった白い大きい太陽がはっきりと水平線に現れたのは、夜の8時30分過ぎであった。夕陽はしばらく、そこにだんだん小さくなりながらぐずぐずと、とどまっていたが、やがて、海のかなたに姿を消してしまった。その瞬間、紫紺に海が染まったが、しばらくの間、青い空が広がっていた。見えない太陽の残光が放っているのであろうか、暗い海原すれすれにオレンジ色と赤の太い帯が現れた。さいごには、赤いろのなかにレモンいろの繊細な絹の帯が紫紺の空と黒い海のあいだに横たわっていたのが、夜の9時半を過ぎていた。

最後の船の夜も、海からこのような特別なプレゼントをもらって、感謝の気

持ちでいっぱいになった。同時に、船上から刻々と変幻自在に姿を変えていく大自然と心を交わす至福の 때가、終わってしまった寂寥感がじわじわと胸にしみてきた。寒い甲板には、いつの間にか、私だけになっていた。さっきまで連れが傍にいたのに.....

船のロビーに降りて行ったのが、10時をすでに過ぎていた。ボード上の航路を確かめると、船は首都サンティアゴを目指して北上していた。左舷から乗りだすように、日没の美しさにばかりに気をとられて、右舷の東はおろそかになっていた。昨日の夕方、出航したプエルト・モンとサンティアゴの間には、先記の歴史上、重要なコンセプションの港町がある。残念だが、そこには寄港しない。ビオビオ河口のあたりをぶらぶら歩いてみたい町であるが.....位置からすると、夜中あたりにとおり過ぎるようである。だから、船上からでも、ちらっとも眺められない..... (つづく)

## 参考文献

- モーターサイクル南米旅行日記。チェ・ゲバラ。棚橋加奈江訳。現代企画室。東京。2004年。
- 第2回 AMERICA 放浪日記 ふたたび旅へ。チェ・ゲバラ。棚橋加奈江訳。現代企画室。東京。2004年。
- ゲバラ日記。チェ・ゲバラ。高橋正訳。角川文庫。東京。1999年。
- ゲバラ。アラン・アマー。廣田明子訳。原書房。東京。2004年。
- スペイン現代史。若松隆。岩波新書。東京。1992年。
- 物語 スペインの歴史。岩根罔和。中公新書。東京。2002年。
- 物語 メキシコの歴史。大垣貴志郎。中公新書。東京。2017年。
- 物語 ラテン・アメリカの歴史。増田義郎。中公新書。東京。2017年。
- ラテンアメリカを知る事典。平凡社。東京。1987年。
- パタゴニアに行く。野村哲也。中公新書。東京。2011年。
- エリザベス、ELIZABETH。トム・マグレガー。新潮文庫。東京。1999年。
- エリザベスとエセックス。リットン・ストレイチー。中公文庫。東京。1999年。
- グレートジャーニー、人類5万キロの旅。関野吉晴。角川文庫。東京。2010年。
- 地球の歩き方、アルゼンチン、チリ、バラグアイ、ウルグアイ。1018 - 19年。ダイヤモンド・ビッグ社。東京。2017年。
- 続審問。ホルヘ・ルイス・ボルヘス。岩波文庫。東京。2009年。
- Viaje por Sudamérica. Ernesto Che Guevara, Alberto Granado. Editorial Abril. La Habana (Cuba). 1992.
- Inés del alma mía. Isabel Allende. Penguin Random House Grupo Editorial. Barcelona, España. 2005.
- Cartas de la conquista de México. Hernán Cortés. SAEPE. Madrid España. 1985.



Lautaro



Pedro Valdivia



(上、左)

ラウタロ、マプーチェ族のカシーケ

(上、右)

ペドロ バルディビア、サンティアゴ、  
チリ、の建設者

(下、左)

ペトロウェ滝およびオソルノ火山、  
プエルト・バラス、チリ



最初のドイツ人入植者、プエルト・モン、チリ



プエルト・モンからバルパライソへの航路地図、太平洋を北上

**2. DOS CAMINOS: BUDISMO Y CRISTIANISMO (II)**

(Ensayo desde una hermenéutica cristiana)

Por Bernardo Villasanz.

**INTRODUCCIÓN**

Intentamos aproximarnos a los conceptos básicos de la creencia budista y cristiana a través de la contrastación de los textos básicos. El budismo según la definición léxica se refiere a la doctrina filosófica y religiosa, derivada del brahmanismo, fundada en la India en el siglo VI a. C. por *el Buda\** Gautama.

La rueda del Dharma es la traducción del Sánscrito de la palabra “Dharmacakra”. Los ocho rayos de la rueda representan los Ocho Nobles Caminos del Budismo (correcta visión, correcta aspiración, palabras correctas, conducta correcta, esfuerzo correcto, pensamientos correctos y concentración correcta). Seguimos aquí el texto de la enseñanza de Buda de acuerdo a la versión de BUKKYO DENDO KYOKAI (Fundación Promotora del Budismo).

---

\* *Buda*: (en sánscrito बुद्ध *buddha*, “despierto o iluminado”) como epíteto caracteriza honoríficamente a quien ha logrado un completo despertar trascendiendo el deseo y todo tipo de aversión o confusión. Se aplica a aquel que ha eliminado por completo todas las perturbaciones mentales y las impresiones grabadas en su mente y que ha alcanzado la sabiduría y el conocimiento perfecto. Según el budismo todos los seres tienen el potencial de convertirse en Buda.

La Biblia (Del lat. biblia, y este del gr. βιβλία, libros). Sagrada Escritura, o sea los libros canónicos del Antiguo y Nuevo Testamento. Como su nombre indica, es el Libro por excelencia, o mejor, una “biblioteca o colección de libros”.

Para los textos utilizados ver la bibliografía citada al final. También incluimos unas anotaciones complementarias en este mismo número de la Revista Fukuoka University Review of Literature & Humanities. (Todas las negritas y subrayados son del autor).

Desde una hermenéutica cristiana se admite que Dios en su justicia, premiará o castigará según la fe de cada espíritu: *“Porque Dios ponderará cuánto mayor esfuerzo habrán tenido que realizar para ser justos los separados del Cuerpo místico, los mahometanos, brahmánicos, budistas, paganos, esos en los que no se hallan la Gracia ni la Vida y con ellas mis dones y las virtudes que de dichos dones se derivan. Para Dios no hay acepción de personas, El juzgará por los actos realizados, no por el origen humano de los hombres. (...)”* -María Valtorta. *“Lecciones sobre la Epístola de San Pablo a los romanos”*. (Capítulo II, versículos 9-11).

**NOTA- 20. -LA ENSEÑANZA DE BUDA (DHARMA)-****CAPÍTULO SEGUNDO: LA FIGURA REAL DEL ALMA HUMANA  
I. LO QUE ESTÁ SUJETO A CAMBIOS NO TIENE SUSTANCIA**

I. El cuerpo y el alma son efectos de una serie de causas y condiciones. El cuerpo no es el “yo”. El cuerpo es la reunión de muchas causas y condiciones, y por ello, es mutable. Si este cuerpo fuese el “yo”, sólo pensándolo podría manejarse a voluntad.

(De: “La enseñanza de BUDA”. DHARMA. CAPÍTULO SEGUNDO: LA FIGURA REAL DEL ALMA HUMANA. BUKKYO DENDO KYOKAI, 2006.)

**NOTA- 20. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“Sed puros. Comenzad a serlo por el cuerpo para pasar al espíritu. Comenzad por los cinco sentidos para pasar a las siete pasiones. Comenzad por el ojo, sentido que es rey y que abre el camino a la más mordiente y compleja de las hambres. El ojo ve la carne de la mujer y apetece la carne. El ojo ve la riqueza de los ricos y apetece el oro. El ojo ve la potencia de los gobernantes y apetece el poder. Tened ojo sereno, honesto, morigerado, puro, y tendréis deseos serenos, honestos, morigerados y puros. Cuanto más puro sea vuestro ojo, más puro será vuestro corazón. Estad atentos a vuestro ojo, ávido descubridor de los pomos tentadores. Sed castos en las miradas, si queréis ser castos en el cuerpo. Si tenéis castidad de carne, tendréis castidad de riqueza y de poder; tendréis todas las castidades y seréis amigos de Dios. No temáis ser objeto de burlas por ser castos, temed sólo ser enemigos de Dios”. 96. (MV)

-“Tened en cuenta que el alma puede morir antes que el cuerpo y podéis llevar en vuestro caminar, sin saberlo, un alma putrefacta. ¡Es tan insensible el morir de un alma! Como la muerte de una flor: sin un grito, sin una convulsión... inclina sólo su llama como corola cansada y se apaga. Después, mucho después alguna vez, inmediatamente después otras veces, el cuerpo advierte que lleva dentro un cadáver verminoso, y se vuelve loco de espanto, y se mata por huir de ese connubio... ¡Oh, no huye! Cae exactamente con su alma verminosa sobre un bullir de sierpes en la Gehena”. 98. (MV)

-“Vosotros sois reyes porque sois libres en vuestro pequeño reino individual, en el yo; en él podéis hacer lo que queráis, como queráis”. 80. (MV)

-“ Sólo el yo lleva la marca de todas la ruinas, pero sin el yo todo es seguridad.”  
Noviembre 22, 1901 (LP)

**NOTA- 21. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

El rey de un país castiga al que debe castigarse y premia al que debe premiarse y hace todo según su voluntad. Sin embargo, en contra de sus deseos, su cuerpo enferma y envejece. **Ni lo más mínimo se realiza de acuerdo a lo que uno desea.**

De la misma forma esta **alma tampoco es el “yo”**. También el alma es la reunión de muchas causas y condiciones, por lo tanto es mutable. Si el alma fuese el “yo” se podría hacer según sus determinaciones, pero el alma, sin quererlo, piensa en el mal y sin desearlo se aleja del bien. Nada se realiza según su voluntad.

**NOTA- 21. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“Si supierais preguntar a vuestra **alma**, ella os diría que el significado verdadero, exacto, vasto cuanto la creación, de la palabra “domine” es éste: “Para que el hombre domine todo: sus tres estratos (el inferior, animal; el estrato intermedio, moral; el estrato superior, espiritual), y oriente los tres hacia un único fin: poseer a Dios”. Poseerlo mereciéndolo con este férreo dominio que tiene sujetas todas las fuerzas del **yo** haciéndolas esclavas de esta única finalidad: merecer poseer a Dios. Vuestra alma os diría que Dios había prohibido el conocimiento del Bien y del Mal, porque el Bien lo había donado con generosidad y gratuitamente a sus criaturas, y el Mal no quería que lo conocierais, porque es un fruto dulce al paladar, pero que, una vez que baja con su jugo a la sangre, ocasiona una fiebre que mata y produce ardiente sequedad en la garganta, por lo cual, cuanto más se bebe de su jugo traidor, más sed de él se tiene.” 17. (MV)

-“Quiero decirles a estos desdichados amados de Dios que se resignen en su dolor, que hagan de él llama que abra las cadenas de la galera y de la vida, consumiendo en **el deseo** de Dios este pobre día que es la vida, día oscuro, borrascoso, colmado de miedo y de fatigas, para entrar en el día de Dios, luminoso, sereno, ya sin miedos ni decaimientos. Basta con que sepáis, vosotros, mártires de una penosa suerte, ser buenos en vuestro sufrimiento, basta con que aspiréis a Dios, para que entréis en la gran paz, en la infinita libertad del Paraíso.” 154. (MV)

-“No basta no hacer el mal, hay que no **desear** hacerlo. Quien maldice, deseando tragedias y muertes, no es muy distinto de quien físicamente mata, porque dentro de sí desea la muerte de aquel a quien odia. En verdad os digo que el **deseo** no es sino un acto retenido; como el que ha sido concebido en un vientre: ya ha si formado pero aún permanece dentro. El **deseo** malvado envenena y destruye, porque persiste más que el acto violento y más profundamente que el acto mismo.” 170. (MV)

**NOTA- 22. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

2. A la pregunta “¿Es el **cuerpo** eterno o mutable?”, todos contestarán que es mutable. A la pregunta “¿Lo mutable es sufrimiento o felicidad?”, todos contestarán que es sufrimiento, al pensar en que algún día llegarán a envejecer, enfermar y morir. Por eso es erróneo pensar que es “propiedad de uno”, algo que es mutable y produce sufrimiento. El **alma** también es mutable y es sufrimiento. El “**yo**” no es propiedad de uno. Por ello el cuerpo y el alma que forman al individuo, y el mundo exterior que lo rodea están lejos de ser el “yo” o lo “mío”.

**NOTA- 22. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*-“Hija mía, muchas veces sucede a las almas lo que sucede en el aire: El aire, por los olores que exhala la tierra se ensucia y se siente un aire pesado, oprimente y nauseante, de modo que son necesarios los vientos para limpiar el aire, de manera que purificado el aire se respira después un vientecillo finísimo, que se estaría a boca abierta para respirar este aire purificado. Todo esto sucede en **las almas**, muchas veces la complacencia, la estima propia, **el yo** y todo lo que es humano ensucian el aire del **alma**, y Yo me veo obligado a mandarles el viento de la frialdad, el viento de la tentación, de la aridez, de la calumnia, de modo que estos vientos limpian el aire del **alma** y la purifican, la reducen a la nada, y la nada abre la puerta al Todo, a Dios, y el Todo hace soplar tantos vientecillos perfumados, de modo que a boca abierta toma este aire y la deja toda santificada.” (LP)*

*-“Tenéis un destino, sí, lo tenéis; en la mente de Dios, que os crea, hay un destino para vosotros. Os lo desea el Padre y es destino de amor, de paz, de gloria: "la santidad de ser sus hijos". Éste es el destino que, presente en la mente divina desde el momento en que con el barro fue hecho Adán, estará presente hasta la última creación de alma de hombre. Pero el Padre no os violenta en cuanto se refiere a vuestra condición regia. El rey, si está prisionero, ya no es rey: es un ser abyecto. Vosotros sois reyes porque sois libres en vuestro pequeño reino individual, en **el yo**; en él podéis hacer lo que queráis, como queráis. 80 (MV)*

*-¿El alma?... -El **alma**. Esa cosa divina que Dios crea para cada uno de los hombres: compañera en la existencia, superviviente más allá de la existencia. -¿Y dónde está? -En lo profundo del **yo**. Pero, a pesar de que esté, como cosa divina, en el interior del más sagrado templo, de ella se puede decir -y digo “ella”, no ésta, porque no es una cosa, sino un ente verdadero y digno de todo respeto - que no está contenida, sino que contiene. 129. (MV)*



**NOTA- 23. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

Tan sólo el alma que no ha abierto los ojos a la **Sabiduría** tiene la obsesión al **“yo”** y a lo **“mío”**. Puesto que el cuerpo y todo lo que lo rodea han sido originados por una serie de causas y condiciones, ellos están en continua mutación y nunca pueden llegar a su fin.

Como el agua que corre o la luz de una candela que no cesa de cambiar, así también el **alma** no permanece un momento quieta, se mueve y alborota como un monito. El hombre consciente al ver y escuchar esto debe alejar de sí **el apego** al cuerpo y al alma. Cuando lo haya conseguido, logrará alcanzar la **Iluminación**.

**NOTA- 23. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*-“El alma sabe, al menos confusamente, cuánto tiempo le es dado: respecto a la eternidad, prácticamente nada. Y el alma incita a todo **el yo** a actuar. (El alma sabe... Con una nota en una copia mecanografiada, MV precisa: “Sabe que la duración de la vida terrena es breve y la muerte puede descargar su mano de improviso, incluso en tierna edad o juventud. Por eso incita a obrar bien, enseguida...”) Pero, ¡pobre alma! La verdad es que en muchas ocasiones se ve oprimida, pisoteada, amordazada para no oír sus palabras. Esto sucede en los que no tienen buena voluntad. Por el contrario, los hombres justos, desde la niñez, escuchan al alma, obedecen sus consejos, y, laboriosos, obran continuamente” 383. (MV)*

*-“Venid a mí todos los que tengáis buena voluntad. No os asuste ni lo que sois ni lo que fuisteis, Yo soy el Agua que lava el pasado y fortalece para el futuro. Venid a mí los que tengáis pobreza de **sabiduría**. En mi palabra hay **sabiduría**. Venid a mí, haceos una vida nueva sobre la base de otros conceptos. No temáis no saber ni no poder hacer. Mi doctrina es fácil, mi yugo es ligero. Yo soy el Rabí que da sin pedir nada en cambio, nada sino vuestro amor. Si me amáis, amaréis mi doctrina, y, por tanto, también a vuestro prójimo, y tendréis la Vida y el Reino. Ricos, despojaos del **apego** a las riquezas y comprad con ellas el Reino con todas las obras de misericordioso amor al prójimo; pobres, despojaos de vuestro sentimiento de humillación y caminad por el camino de vuestro Rey. Con Isaías (55, 1) digo: “Sedientos, venid a las aguas; y también vosotros, los que no tenéis dinero, venid a comprar”. Con el amor compraréis lo que es amor, lo que es alimento que no se estropea, alimento que verdaderamente sacia y fortalece”. 453. (MV)*

*-“El **alma** que hace mi Voluntad parece que no hace nada, pero hace todo, porque estando en mi Voluntad obran a lo divino, ocultamente y en modo sorprendente, así que son luz que **ilumina**, son vientos que purifican, son fuego que quema, son milagros que hacen hacer los milagros, , y quienes los hacen son sólo los canales, porque en ellas es donde reside la potencia para hacerlos (...) Marzo 15, 1912. (DV)*



**NOTA- 24. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

3. Hay cinco cosas en la vida que no pueden ser logradas por ningún hombre; no **envejecer** teniendo un cuerpo que envejece; no **enfermar** teniendo un cuerpo que enferma; no **morir** siendo mortal; no **destruirse** siendo destructible, y no **extinguirse** siendo extinguido.

Los hombres sufren al enfrentarse con estas verdades inevitables; en cambio, el que ha recibido las Enseñanzas de Buda, no se preocupa tan neciamente puesto que sabe que lo ineludible es ineludible.

**NOTA- 24. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“Que el cordero sea sin mancha, macho, de un año.” No hay tiempo para el Cordero de Dios. Él es. Igual en el último día que como era en el primero de esta Tierra. Aquel que es como el Padre no conoce en su divina naturaleza **envejecimiento**. Y su Persona conoce una sola vejez, un solo cansancio: la desilusión de haber venido en vano para demasiados. 589. (MV)

-“Sin embargo, el que está llagado por **enfermedades** inmundas, causadas en él por vicios indignos, se avergüenza de sus llagas ante sus familiares y amigos, e incluso ante los médicos, y, a veces, es tan completamente necio, que las mantiene ocultas hasta que el hedor no las pone de manifiesto. Pero entonces es demasiado tarde para poner remedio. Los humildes son siempre sinceros, y también son personas valientes, que no tienen motivo para avergonzarse de las heridas recibidas en la lucha. Los soberbios son siempre embusteros y cobardes; por su orgullo, por no querer ir a Aquel que puede curarlos y decirle: “Padre, he pecado. Pero, si Tú quieres, me puedes curar”, llegan a la muerte. Muchas son las almas que por el orgullo de no tener que confesar una culpa inicial llegan a la muerte”. 567. (MV)

-“Judas, Yo voy a **morir**, y voy feliz porque ha llegado la hora que esperaba desde hace milenios, la hora de unir de nuevo a los hombres con su Padre. A muchos no los uniré. Pero el número de los salvados que mientras muera contemplaré me consolará de la congoja de morir inútilmente por tantos”. 575. (MV)

-“¿La tentación de complacerse en ser santo! ¡La más sutil! ¡Cuántos, por esta soberbia, pierden la santidad que habían conquistado! ¡Con qué corrompió Satanás a Adán? Con la tentación del sentido, del pensamiento y del espíritu. ¿Y no soy Yo el Hombre que debe crear otra vez al hombre? De mí, la nueva Humanidad. Entonces, Satanás busca los mismos caminos para **destruir**, y para siempre, a la raza de los hijos de Dios”.527. (MV)

-“Yo soy el Pan de Vida. En mí se halla. Su nombre es Jesús. Quien viene a mí no tendrá ya hambre, y quien cree en mí no tendrá ya sed, porque los ríos celestes verterán sobre él sus aguas y **extinguirán** toda sed material”. 354. (MV)

**NOTA- 25. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

Luego hay otras cuatro verdades en el mundo. Primero, todo ser viviente nace en la **ignorancia**. Segundo, todos los objetos del deseo son **mutables**, inseguros y sufrimiento. Tercero, todo lo que existe es **mutable**, inseguro y causa de sufrimiento. Cuarto, no existe nada que pueda ser llamado un **“yo”** y no existe ninguna cosa en el mundo que pueda ser considerada **“mía”**.

Independientemente de la aparición de Buda en este mundo, estas verdades son un principio eterno, verdadero e incontrovertible. El Buda lo supo y por ello las predicó y enseñó el Dharma a los hombres.

**NOTA- 25. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*-“Estaba en la **ignorancia**, mas ahora he comprendido. Tú no deseas un sacrificio de carneros, sino el holocausto de un corazón contrito. Un corazón contrito y humillado te es más grato que los borregos y carneros, porque Tú para ti nos has creado, y quieres que esto lo tengamos presente y te restituyamos lo que es tuyo.” 132. (MV)*

*-“Parece que ya ha empezado Jesús su discurso, porque oigo: -...Es verdad. Decís: “No te abandonaremos nunca porque sería abandonar a Dios”. ¡Oh, pueblo de Guerguesa, recuerda que nada hay más **mutable** que el pensamiento humano! Estoy convencido de que en este momento realmente pensáis así. Mi palabra y el milagro realizado os han exaltado en este sentido y ahora sois sinceros en lo que decís”. 159. (MV)*

*-“No te maravilles, por tanto, si digo: “Es necesario que vosotros nazcáis de nuevo”. Éstos han sabido renacer. El joven ha matado la carne y ha hecho renacer el espíritu poniendo su **yo** en la hoguera del amor. Enteramente ha sido consumido de toda materia. Y he aquí que de las cenizas surge su nueva flor espiritual, maravilloso helianto que sabe volverse hacia el Sol eterno. El anciano ha puesto la segur de la meditación honesta en la base de su viejo pensamiento, y ha arrancado la vieja planta dejando sólo una yema, la de la buena voluntad, de la cual ha hecho nacer su nuevo pensamiento. Ahora ama a Dios con espíritu nuevo, y lo ve.” 116. (MV)*

*-“5) Quiero que el mundo sepa que Dios es **inmutable**, que nunca cambia ni disminuye su amor por los hombres; necesito que el hombre sepa que nunca pongo límites a Mi perdón y que al hijo pródigo no le pregunto cómo ha dilapidado Mi patrimonio, ni le pido cuentas de sus maldades. Es una nueva Misericordia que quiero derramar sobre esta nueva generación”. CA-160 24-Ene-96 Jesús*

**NOTA- 26. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

## II. LA ESTRUCTURA DEL ALMA

1. La ignorancia y la Iluminación, ambos nacen del alma. **Todo es originado por el alma**, así como el prestidigitador saca de sus manos infinidad de cosas. Los cambios que sufre el alma humana no tienen límite; sus actividades tampoco tienen fin. Esta actividad del alma produce a su alrededor toda clase de circunstancias: de un alma impura nace un ambiente impuro, de un alma pura nace un ambiente puro, y así tampoco las circunstancias tienen límite.

**NOTA- 26. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“1) Busco almas que Me comprendan. Sin ellas, sin Mis amados, Yo no actúo y si ellos Me aceptan, se cumplirá Mi obra. 2) Tengo sed de los que Me ofenden y deseo que se informen de sus faltas, porque una de las principales faltas que las aleja de Mí es la ignorancia.” 6-Ene-96 (CA)

-“...3) Cuando las almas, entregadas completamente a Mí viven para hacer Mi Voluntad, viviendo en la Gracia, viven en Mí y Yo vivo en ellas. Mi imagen queda grabada en el alma, con caracteres indelebles y no se borra nunca. Eso hará posible Mi reinado en el mundo porque, llevando todos Mi señal en el alma, ajustarán sus acciones y amor a Mi Voluntad. El hombre ha de querer y desear que Mi Reino venga a él, en toda la fuerza de Mi Voluntad. Y rezar para que así sea.” 11-Ene-96 (CA)

-“La vida que Yo prometo y doy es Yo mismo y no una vida condicionada por las circunstancias, buenas o malas. Llámame, hija Mía, implora el poder de Mi sangre redentora porque solamente ocurren los milagros para el que tiene fe, para el que cree”. CM-21 26-Feb-97 Jesús

“...5) Virtualmente, el alma de un niño no se agranda con el crecimiento del cuerpo; pero en la primera edad el alma sigue al cuerpo y se adapta a él como prisionera encerrada en su celda. Tiene una vida propia que se manifiesta de muchísimas maneras; ciertamente no puede conocerse a sí misma, no puede querer y entender libremente, ceñida como está por la vida del cuerpo.” CM-27 26-Mar-97 Jesús

-“Cada árbol se conoce por su fruto. No se recogen higos de los espinos, ni de la zarza se vendimian uvas. El hombre bueno, del buen tesoro del corazón saca lo bueno, y el malo, del malo saca lo malo. Porque de lo que rebosa el corazón habla su boca.” (Lucas 6:44-45)

**NOTA- 27. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

Un cuadro es pintado por un pintor: las circunstancias son hechas por el alma. La circunstancia creada por Buda es pura porque está libre de deseos, la del hombre está contaminada por el deseo.

El alma, como un hábil pintor, pinta toda clase de ambientes. En este mundo no hay nada que no sea creado por las actividades del alma humana. Así como crea el alma de Buda, crea también el alma de los hombres. En el hecho de que el alma lo crea todo, el Buda y los hombres son iguales. Buda sabe perfectamente que **todo es creado por el alma**; el que también lo sabe podrá ver al verdadero Buda.

**NOTA- 27. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“...8) Feliz el **alma** que quiera completar Mi Pasión porque también Yo le daré dones y dones y la mostraré con mucha complacencia a todos los que puedan apreciar el esfuerzo que pone en agradarme. Sí, feliz el alma que teme sufrir las pocas cosas que Yo dejé para ustedes, para poderse unir a Mí de modo sustancial y eterno”. 2-Jun-97 (CM)

-“1) Si He dicho que quien no abraza su cruz no es digno de seguirme, con ello quería significar la serie interminable o casi interminable de todas las cosas por las que pasa su **alma**, ya sea por hechos externos, ya por cosas internas; más aún, es mayor lo interno ya que si del exterior llegan penas estas pueden combatirse y en todo caso soportarse ayudándose con la palanca de su humanidad o alejándose de tales embates, de todas las penas que, podrían ocasionarles las cosas, las situaciones, las personas, en tanto que en el caso de las internas, las cosas cambian radicalmente”. 1-Jun-97 Jesús (CM)

-“Todo acto de esta humildad es un rayo de luz que ilumina su **alma**, rayo que Yo quiero darles, siempre y que, infelizmente, no siempre es aceptado. ¡Oh! Claro que Me importa que hayan caído pero más Me importa que vengan en seguida a Mí sin sorprenderse del mal cometido, sino con ánimo amoroso”. 22-May-97 Jesús (CM)

-“...9) El silencio es cruz, por eso es precioso. El silencio es contradicción, por lo tanto es muy útil a todos. Pero siendo difícil, no es tan importante como el silencio del **alma** delante de Mí porque quien calla de muchas cosas que en el fondo le urgen, se contradice tremendamente.” 14-May-97 Jesús (CM)

-“...6) El Espíritu que vivifica parece ausente de muchas de Mis amadas **almas**, oprimidas con prejuicios, fastidiadas con ocupaciones y preocupaciones humanas; muchos Me han perdido porque corren locamente tras sus afectos terrestres. Gran desolación es el campo de las almas y si no interviniera Yo con buenas dosis de atracciones espirituales, muchísimas Me abandonarían... Hablo a los Sacerdotes, a los simples fieles y sobre todo, a los que se obstinan en llamar Israel al pueblo Mío de hoy”. 11-May-97 Jesús. (CM)

**NOTA- 28. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

2. Sin embargo, el alma sufre, teme y se queja continuamente. Teme lo que ha ocurrido y teme lo que ocurrirá. Esto es porque tiene dentro del alma, la **ignorancia** y un maniático **apego**.

De esta alma hambrienta nace el mundo de la inquietud. En resumidas cuentas, las causas y condiciones de este mundo de incertidumbre están dentro del alma misma. **La vida y la muerte** aparecen tan sólo de dentro del alma; **cuando se extingue el alma** que piensa en la vida y en la muerte, la inquietud sobre la vida y la muerte termina.

**NOTA- 28. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“... 7) No es la cosa sino el **apego** a la cosa lo que Yo reclamo, no una persona sino el desmedido **apego** a esa persona. Esto es hacerse pobres y al mismo tiempo enriquecerse cada vez más. 8) Pobre hombre, criatura Mía que vives en lo que tienes ¡qué miserable te veo! Mientras más cosas tienes más miserable eres, mientras más **apegos** tienes más inútil te haces a ti mismo. Mi Querer es el que te priva muchas veces de esta cosa o de aquella persona que no aportaría mucho a tu vida espiritual. ¿Cuándo lo crearás?” CM-96 4-May-97 Jesús (CM)

-“...6) El **apego** a las cosas es lo que transforma el ánimo del hombre, porque todas las cosas en sí son iguales. La excelencia en las cosas genera adulación de una parte y de otra complacencia, de manera que entre estas punzantes espadas, el hombre se debilita, se arrodilla y cae...”CM-112 11-May-97 Jesús (CM)

-“Yo dije: “Bienaventurados los pobres de espíritu”, es decir Bienaventurados los que tienen el espíritu falto de soberbia, ya que éste es el sentido de las palabras en hebreo. La frase literal y algunas explicaciones han torcido el sentido que Yo He dado a estas palabras, de modo que pareciera que alabo la pobreza de **apego** a los bienes y en cambio, en el caso, aprecio la pobreza de soberbia, en dos palabras: la humildad.” CM-123 20-May-97 Jesús (CM)

-“...3) ¡Oh, **alma** predilecta, detente! No trates de salir de tus tinieblas, porque no puedes darte luz por ti misma, porque no la tienes si Yo no te la doy. Detente y trata de examinar en qué lugar te encuentras. Tienes mucho que aprender estando así suspendida en la oscuridad... La luz volverá. Te la devolveré todavía más grande que la anterior.” CS-40 11-Ago-97 Jesús (CS)

**NOTA- 29. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

De esta forma el mundo ilusorio de la **duda** nace del alma, y porque vemos a través del alma en **duda**, existe el mundo de la **duda**. Cuando los hombres comprendan que el mundo de la incertidumbre existe dentro del alma, entonces alcanzarán la Iluminación. El alma conduce, arrastra y rige el mundo. El alma en **duda** crea un mundo de sufrimientos.

**NOTA- 29. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“¡Cuando uno está unido a Jesús, es fuerte! Fuerte contra todo. Estaréis llenos de esperanza, porque **no dudaréis** del Corazón de los corazones, que os ama con la totalidad de sí mismo. Seréis sabios. Seréis todo. Amad a Aquel que anuncia la felicidad verdadera, que predica la salud, que va, incansable, por los montes y los valles convocando al rebaño para reunirlos; a Aquel en cuyo camino está la Paz, como también hay paz en su Reino, que no es de este mundo, sino que es verdadero, como verdadero es Dios. Abandonad cualquier camino que no sea el suyo. Liberaos de toda tiniebla. Id a la Luz. No seáis como el mundo, que no quiere ver la Luz, que no quiere conocerla. Vosotros id a nuestro Padre, que es el Padre de las luces, que es Luz sin medida, a través del Hijo, que es la Luz del mundo, para gozar de Dios en el abrazo del Paráclito, que es fulgor de las Luces en una sola beatitud de amor, que a los Tres centra en Uno”. 324. -Juan- (MV)

-“¡Derrotas y más derrotas!... Parecemos como malditos... Jesús le pone la mano en el hombro: « -¿No sabes que ése es el sino de los mejores? -¡Sí, sí! ¡Lo sé desde cuando estoy contigo! Pero, de vez en cuando sería necesario algo distinto - y antes lo teníamos - para confortar el corazón y la fe... -¿**Dudas** de mí, Santiago? ¡Cuánto dolor tiembla en la voz del Maestro! -¡No, no!... La verdad es que no es muy seguro el “no”. -Pero dudar, **dudas**. ¿De qué, entonces? ¿Ya no me amas como antes? ¿Ver que me echan de un lugar, o que se burlan de mí, o, sencillamente, que no me prestan atención en estos confines fenicios, ha debilitado tu amor? Hay un llanto tembloroso en las palabras de Jesús, a pesar de que no haya sollozos ni lágrimas: es verdaderamente su alma la que llora.” 330. (MV)

-“Resistid a la **duda**. Yo no miento. Yo soy Aquel de quien hablan los profetas. Como la madre de Juan hace un rato, alzad el recuerdo de lo que os he hecho, y decid: “Estas obras son propias de Dios. Nos las ha dejado como recuerdo, como confirmación, como ayuda para creer, y creer además en esta hora precisamente”. Luchad y venceréis contra la duda que sofoca la respiración de las almas. Luchad contra las palabras que os van a decir. Recordad a los profetas y mis obras. A las palabras enemigas responded con los profetas y con los milagros que me habéis visto hacer. No tengáis miedo. Y no seáis ingratos por miedo, callando lo que Yo he hecho para vosotros”. 405. (MV)

**NOTA- 30. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

3. Todo es controlado y constituido por el alma. Como la carreta va en pos del buey que la tira, así el sufrimiento sigue al alma que se rodea de pensamientos impuros y de pasiones mundanas. Pero si se habla y actúa con un alma limpia la felicidad seguirá al hombre como una sombra. El que actúa mal sufre en este mundo pensando en lo que hizo, y en la otra vida sufre mucho más recibiendo el castigo de su mala conducta. El que hace el bien, es feliz en este mundo pensando en lo que hizo, y lo será mucho más en la otra vida recibiendo su premio.

**NOTA- 30. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*-“El hombre no sabe, o no recuerda, o, recordando, no quiere prestar obediencia a esta santa orden del Señor - y hablo también para los gentiles que me escuchan - de hacer el bien, que es bien en Roma como lo es en Atenas, en Galia o en África, porque la ley moral existe bajo todos los cielos y en todas las religiones, en todo corazón recto. Y las religiones, desde la de Dios hasta la de la moral individual, dicen que la parte mejor de nosotros sobrevive, y que según como haya obrado en la tierra así será su suerte en la otra vida. Fin, pues, del hombre es la conquista de la paz en la otra vida; no las comilonas, la usura, el abuso de la fuerza, el placer, aquí, por poco tiempo, para pagarlos eternamente con muy duros tormentos. Pues bien, el hombre no sabe, o no recuerda, o no quiere recordar esta verdad. Si no la sabe, es menos culpable; si no la recuerda, es bastante culpable, porque hay que tener encendida la verdad, cual antorcha santa, en las mentes y en los corazones; pero, si no la quiere recordar, y, cuando resplandece, cierra los ojos para no verla, aborreciéndola como a la voz de un orador pedante, entonces su culpa es grave, muy grave”. 329 (MV)*

*-“Por eso hay que actuar siempre con honestidad para vivir con paz. Y quien vive así no tenga miedo. Ni miedo en esta vida, ni miedo por la otra vida. No, amigos míos, os digo: quien obra como justo no tema. Ni miedo de los que matan - sí, de los que pueden matar el cuerpo -, pero que después de eso no pueden hacer más. Os digo qué debéis temer. Temed a aquellos que, después de haberos hecho morir, os pueden mandar al infierno, o sea temed a los vicios, a los malos compañeros, a los falsos maestros, a todos los que os insinúan el pecado o la duda en el corazón, temed a los que más que al cuerpo tratan de corromper al alma y llevaros a la separación de Dios y a pensamientos de desesperación de la divina Misericordia. Temed esto, os lo repito. Porque en ese caso vuestra muerte será eterna. Pero, por lo demás, por vuestra existencia, no temáis. El Padre vuestro no pierde de vista ni siquiera a uno de estos pájaros pequeñitos que hacen sus nidos entre las frondas de los árboles. Ni uno de ellos cae en la red sin que su Creador lo sepa”. 421. (MV)*

**NOTA- 31. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

Cuando se enturbia el alma, el camino por seguir ya no será plano y por eso tropezará. Si el alma está **pura**, el camino será plano y será más tranquilo el andar. El que goza de **la pureza** del alma y del cuerpo ha roto las redes del diablo y camina por la tierra de Buda. El que tiene el alma en calma obtiene la paz y puede cultivar, día y noche, su alma con más diligencia.

**NOTA- 31. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*-“Dice Jesús: “Hoy escribe esto sólo. **La pureza** tiene un valor tal, que un seno de criatura pudo contener al Incontenible, porque poseía la máxima pureza posible en una criatura de Dios. La Santísima Trinidad descendió con sus perfecciones, habitó con sus Tres Personas, cerró su Infinito en pequeño espacio- no por ello se hizo menor, porque el amor de la Virgen y la voluntad de Dios dilataron este espacio hasta hacer de él un Cielo - y se manifestó con sus características:..”. 1. (MV)*

*-“Es la Virgen. Es la Única. Es la Perfecta. Es la Completa. Pensada así. Engendrada así. Que ha permanecido así. Coronada así. Eternamente así. Es la Virgen. Es el abismo de la intangibilidad, de **la pureza**, de la gracia que se pierde en el Abismo de que procede, es decir, en Dios, Intangibilidad, Pureza, Gracia perfectísimas”. 5. (MV)*

*-“Yo recorrí en sentido inverso el camino de los dos pecadores. Obedecí. Obedecí en todos los modos. Dios me había pedido ser virgen. Obedecí. Habiendo amado la virginidad, que me hacía pura como la primera de las mujeres antes de conocer a Satanás, Dios me pidió ser esposa. Obedecí, llevando al matrimonio a **la pureza** que tuvo, a ese grado de **pureza** que Dios tenía en su pensamiento cuando creó a los dos Primeros. Convencida de mi destino de soledad en el matrimonio y de desprecio del prójimo por mi esterilidad santa, ahora Dios me pedía ser Madre. Obedecí. Creí que ello era posible y que esa palabra venía de Dios, porque la paz iba entrando en mí al oírla. No pensé: “Lo he merecido”. No me dije a mí misma: “Ahora el mundo me admirará, porque soy semejante a Dios dando ser a la carne de Dios”. No. Me anonadé en la humildad.” 17. (MV)*

*-“¿Cómo se hace notoria esta buena voluntad? Con una vida hecha toda de Dios hasta donde os es posible. En la fe, en la obediencia, en **la pureza**, en la caridad, en la generosidad, en la oración. No en las prácticas. En la oración.” 32. (MV)*



**NOTA- 32. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

## III EL ESTADO REAL DE LAS COSAS

1. Ya que todas las cosas de este mundo han sido originadas por una serie de causas y condiciones, fundamentalmente no existe diferencia entre ellas. La aparente **distinción** existe porque el alma humana ve de ese modo. En el cielo no existe la diferencia de Este y Oeste, pero los hombres han creado la distinción y creen que eso es la verdad.

**Los números**, del uno al infinito, son, en sí, números completos que no tienen diferencia cuantitativa, pero los hombres para su propia conveniencia hacen la diferencia de lo mucho y lo poco.

**NOTA- 32. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“¿No sabes que quien vive en mi Voluntad debe ser filtrado en la Luz purísima de Ella? Y ser filtrado es más que ser puesto bajo una prensa, porque la prensa, si bien hace todo pedazos, pero deja todo junto, cáscaras y pulpa, las cuales, precipitándose abajo hacen quedar siempre algo de turbio; en cambio, cuando una cosa es filtrada, en especial si es filtrada por la fina Luz de mi Voluntad, no hay peligro de que haga depósito de alguna cosa turbia, sino que todo es claro, semejante a la claridad de la luz en la cual ha sido filtrada, y esto es un gran honor para el alma que vive en mi Querer, que todo lo que hace, si piensa, si habla, si ama, etc., mi Voluntad toma el trabajo de filtrarlo todo en su purísima luz; y esto es necesario a fin de que en todo lo que haga no haya ninguna **distinción** con lo que Nosotros hacemos, sino que todas las cosas se deben dar entre ellas la mano y la semejanza.” Octubre 30, 1923. (LP)

-“...5) La cuestión consiste en discernir. La dificultad estriba en saber la diferencia entre los Mensajes de Dios y los que proceden de otras fuentes. Esta **distinción** resulta sencilla con la aplicación de una regla básica: el pensamiento más elevado, la palabra más clara, el sentimiento más grandioso, son siempre Míos. Todo lo demás procede de otra fuente. 6) Con ello se facilita la labor de discernimiento ya que no debería resultar difícil, ni siquiera para el principiante, identificar lo más elevado, lo más claro y lo más grandioso.” CS-69 22-Oct-97 Jesús (CS)

-“...2) Hijo Mío, así como Yo tengo determinado el **número** de los días de la vida, los grados de santidad o de talento que quiero dar a cada hombre, así también tengo determinado el número de pecados que quiero perdonar a cada uno. Cumplido el que llenó la medida, no queda ya lugar al perdón.” PC-53 25-Oct-96 Dios Padre. (PC)

-“...5) No digas entonces: “Así como Dios me perdonó otros pecados, me perdonará éste.” No lo digas, porque si tu añades un pecado nuevo al pecado que ya se te perdonó, debes temer que éste se una al primero y que así se complete **el número** y seas abandonado. 6) Muchos llegan al número determinado, los asalta la muerte y los arrastra al fuego eterno. Viven en delicia y en un instante bajan al sepulcro”. PC-53 25-Oct-96 Dios Padre (PC)

**NOTA- 33. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

En el proceso **evolutivo** de la humanidad no existe ninguna distinción esencial entre la vida y la destrucción. Los hombres hacen una discriminación y llaman a la primera **nacimiento y a la segunda muerte**. En la acción no existe diferencia entre el **bien y el mal**, pero los hombres la hacen para su propia conveniencia.

Buda se mantiene alejado de estas distinciones y ve el mundo como una nube pasajera, como un espejismo. Sabe que todo lo que la mente coge y tira es vano y evita las imágenes creadas por el alma.

**NOTA- 33. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*-“Observad a los gentiles y a los idólatras. ¿Todo su Olimpo, todos sus ídolos, acaso los hacen mejores? No. Porque ellos, si son incrédulos, dicen que sus dioses son una patraña; si son creyentes, piensan: “Son dioses y yo hombre” y no se esfuerzan en imitarlos. Vosotros, pues, tratad de haceros como Yo. Y no tengáis prisas. El hombre **evoluciona** lentamente de animal racional a ser espiritual. ¡Sed compasivos, sed compasivos los unos para con los otros! Nadie, excepto Dios, es perfecto”. 498 (MV)*

*-“El hombre cae en un error al considerar **la vida y la muerte**, y al aplicar estos dos nombres. Llama “vida” al tiempo en que, dado a luz por la madre, comienza a respirar, a nutrirse, a moverse, a pensar, a obrar; y llama “muerte” al momento en que cesa de respirar, comer, moverse, pensar, obrar, viniendo a ser un despojo frío e insensible, preparado para entrar en un seno, el de un sepulcro. Pero no es así. Yo quiero haceros entender la “vida”, indicaros las obras aptas para la vida”. 118. (MV)*

*-“No es lícito hacer violencia a nadie, y tampoco uno a sí mismo. Hicieron **mal**. Conociendo relativamente **el bien**, habrán obtenido de Dios, en ciertos casos, misericordia. Pero a partir de que el Verbo haya aclarado toda verdad y haya dado fuerza a los espíritus con su Espíritu, desde entonces, ya no le será concedido el perdón a quien muera desesperado. Ni en el instante del juicio particular, ni, después de siglos de Gehena, en el Juicio Final, ni nunca. ¿Es dureza de Dio? No: justicia. Dios dirá: “Tú, criatura dotada de razón y de sobrenatural ciencia, creada libre por Mí, decidiste seguir el sendero elegido por ti, y dijiste: ‘Dios no me perdona. Estoy separado para siempre de Él, Juzgo que debo aplicarme por mi mismo justicia por mi delito. Dejo la vida para huir de los remordimientos’, sin pensar que ya no habrías sentido remordimientos si hubieras venido a mi seno paterno. Recibe eso mismo que has juzgado. No violento la libertad que te he dado”. 69. (MV)*

**NOTA- 34. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

2. Los hombres se adhieren a los productos de su imaginación. Sienten fuerte apego a la riqueza, la fortuna, el honor y la vida. Los hombres hacen la distinción entre lo existente y lo no existente, lo malo y lo bueno, lo correcto y lo falso. Sintiendo apego por todo y vagando en la oscuridad, atraen los sufrimientos.

**NOTA- 34. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“...35) *La principal razón por la cual Yo enseñé y enseñó hoy el desprecio de las cosas mundanas, está en el peligro de que el hombre pueda perderse con el apego a ellas”*  
CM-31 1-Abr-97 Jesús. (CM)

-“...8) *Pobre hombre, criatura Mía que vives en lo que tienes ¡qué miserable te veo! Mientras más cosas tienes más miserable eres, mientras más apegos tienes más inútil te haces a ti mismo. Mi Querer es el que te priva muchas veces de esta cosa o de aquella persona que no aportaría mucho a tu vida espiritual. ¿Cuándo lo creerás?”*  
CM-96 4-May-97 Jesús.

-“...13) *Te dejo hacer de dueño de todo te he dicho, no te reprocharé, si tú Me sacrificas tu juicio, es decir si pospones siempre tu juicio al Mío. No es poco, más bien es lo máximo pero si te vences en esto, estarás libre de cosas, de apegos y todo en ti se purificará... Dame tu juicio, oh pequeño y querido hombre, dame tu miseria, ya que tal es tu juicio. ¡Haz el sacrificio de ti de este modo y verás cómo te haré ascender! ¡Qué aire sutil sentirás en los montes divinos que te esperan!”* CM-96 4-May-97 Jesús

-“...6) *El apego a las cosas es lo que transforma el ánimo del hombre, porque todas las cosas en sí son iguales. La excelencia en las cosas genera adulación de una parte y de otra complacencia, de manera que entre estas punzantes espadas, el hombre se debilita, se arrodilla y cae... La excelencia según los hombres es la victoria del amor propio y el olvido de Dios; mientras que la pequeñez es derrota del amor propio sí, pero victoria de Dios en ustedes”.* CM-112 11-May-97 Jesús

-“...5) *Renunciar al mundo es renunciar a sí, puesto que al amor propio se debe atribuir la sed del mundo. Están también los transformistas, es decir, los que transforman las cosas del mundo pero sólo para hacerse dueños suyos, en la ilusión de hacerlo con el consentimiento y bajo la protección de Mi doctrina. A estos hipócritas, prefiero a quienes abiertamente repudian Mis leyes pero que lo reconocen sin fingimiento. 6) Muchos son sinceros al prometerme, por medio de Mis Obispos, el desapego del mundo, es decir aquella costosa renuncia que hace ser pobres peregrinos que viajan a la eternidad”*  
CM-31 1-Abr-97 Jesús.

**NOTA- 35. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

Había una vez un hombre que hacía un largo viaje. Un día llegó a orillas de un gran lago, y pensó: “Este lado del lago es peligroso, pero la otra orilla se ve más tranquila y uno puede estar a salvo.” Construyó una balsa con ramas de árboles, juncos y hojas para cruzar a la otra orilla, adonde llegó sano y salvo. Ya en la otra orilla pensó: “Esta balsa me trajo a esta orilla; me ha servido de mucho, por eso no la tiraré y seguiré el camino llevándola en hombros.” ¿Pensáis que este hombre hizo lo que debía hacer con la balsa? Por cierto que no. Esta parábola explica que **no debemos adherirnos ni a las cosas buenas**; hay que alejarlas. Si hay que alejar de sí las cosas buenas, cuanto más si no lo son.

**NOTA- 35. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*“Sucede que pedís en un momento dado, y os parece justo hacerlo - la verdad es que para ese momento no sería injusta tampoco la gracia pedida -, pero la vida no termina en ese momento y lo que es **bueno** hoy puede no serlo mañana (pero vosotros, conociendo sólo el presente - lo cual es también una gracia de Dios - esto lo desconocéis). Sin embargo, Dios conoce también el futuro, y muchas veces no satisface una oración vuestra para ahorraros una pena mayor”. 172 (MV)*

*“Por esto os digo que no dejéis pasar la ocasión de llevar a cabo **buenas** acciones, para que sean como monedas para pagar vuestros pecados (cuando, por gracia de Dios, de ellos os arrepentís). Las acciones **buenas** -aunque parezcan pasadas, y por tanto se pueda pensar equivocadamente que ya no fermentan en nosotros y crean nuevos estímulos y fuerzas para cosas buenas- están siempre activas, aunque sea con el recuerdo que resurge desde el fondo de un alma humillada y suscita una añoranza del tiempo en que la persona era buena. Y la añoranza es, a menudo, un primer paso por el camino del regreso a la Justicia. Yo he dicho que incluso un vaso de agua dado con amor a un sediento no queda sin premio”. 516 (MV)*

*“Cuando oigo a alguno que me dice: “He conocido a tal o cual persona, he leído tal o cual libro, he tratado de llevar a éste o a aquél al bien, pero ha sucedido que el mal que había en su mente y en su corazón, el mal que había en el libro, ha entrado en mí”, Yo concluyo: “Lo que demuestra que ya habías creado en ti el terreno favorable para que entrase; lo que demuestra que eres una persona débil, completamente carente de nervio moral y espiritual. Porque incluso de nuestros enemigos debemos sacar cosas **buenas**. Observando sus errores debemos aprender a no caer en ellos. El hombre inteligente no es juguete de la primera doctrina que llega a sus oídos”. 174 (MV)*

**NOTA- 36. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

3. Las cosas no vienen ni van; no aparecen ni desaparecen, no son ni dejan de ser. Por lo tanto, nada se consigue ni se pierde. Buda explica que todas las cosas están fuera de la idea de ser y no ser, no son la **existencia** ni la no existencia, **no nacen ni mueren**. Es decir, todas las cosas “son” debido a una serie de condiciones y causas; por lo tanto, ese ser en sí no tiene existencia. Por otro lado, puesto que son originados por **condiciones y causas** relativas, tampoco se puede decir que no existen.

La fuente de donde emana la oscuridad es el sentir adhesión por las cosas al ver **su forma**. Si no se mira la forma no nace este sentimiento. La Iluminación es ver esta verdad y alejarse de este **sentimiento ilusorio**. El mundo, en verdad, es un sueño; las riquezas son ilusiones. Como en la aparente perspectiva de un cuadro, las cosas se ven pero no existen realmente. Todo es como un espejismo.

**NOTA- 36. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

- “*Vida no es **existencia**. Existencia no es vida. Existe esta parrá que se entrelaza con estos soportes, pero no tiene la vida de que Yo hablo. Existe también aquella oveja que bala atada a aquel árbol lejano, pero no tiene la vida de que Yo hablo. La vida de que Yo hablo no empieza con la existencia ni termina cuando la carne llega a su fin. ¡La vida de la cual Yo hablo tiene su principio no en un seno materno; tiene su principio cuando el Pensamiento de Dios crea un alma para habitar en una carne; termina cuando el Pecado la mata!*” 118 (MV)

- “*La vida comienza antes del nacimiento. La vida luego no tiene fin, porque el alma **no muere**, o sea, no se anula. **Muere** a su destino, que es el destino celeste, pero sobrevive en su castigo si así lo ha merecido. Muere a este destino bienaventurado cuando muere a la Gracia. Esta vida, alcanzada por una gangrena cual es la muerte a su destino, dura por los siglos de los siglos en la condena y en el tormento. Si, por el contrario, esta vida se conserva como tal, llega a la perfección del vivir y se hace eterna, perfecta, santa como su Creador*”. 118 (MV)

- “*Pero distinto es lo que sucede detrás de la **apariencia**. Yo vengo a decir: sed sinceros en vuestras obras, porque Dios ve todas las cosas. Inútiles son los sacrificios y vanas las oraciones hechos por pura ostentación cultural, mientras se tiene el corazón lleno de pecado, de odio, de malos deseos*”. 514 (MV)

- “*¿No sabes que todo lo que acaece y lo que existe en la Creación está relacionado y sigue una **ley eterna de dependencias y consecuencias**, de forma que el acto de uno produce vastísimas repercusiones naturales y sobrenaturales?*” 237 (MV)

**NOTA- 37. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

4. Creer que lo que fue creado por infinidad de causas y condiciones exista eternamente es un serio error. Pero también es erróneo pensar que dejará de existir eternamente. Estas diferencias entre vida eterna y muerte eterna, entre existencia y no existencia no se pueden aplicar a la naturaleza esencial de las cosas. Son formas aparentes que se presentan a los ojos humanos. Toda la esencia natural de las cosas está, desde el principio, libre de las formas imaginadas por el hombre debido a su adhesión a lo ilusorio.

Puesto que todas las cosas fueron creadas por una serie de condiciones y causas, están sujetas a los cambios; su apariencia no es constante, ni eterna, ni inmutable como la de las cosas que tienen Sustancia Auténtica. Sin embargo, aunque es mutable y es como una ilusión, un espejismo, al mismo tiempo, la naturaleza esencial de las cosas es constante, eterna e inmutable.

**NOTA- 37. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*-“Nos sucede como al sol, que cuando desde la altura de su esfera se da a la tierra, parece que da sólo luz, pero no es verdad, junto con la luz da todo lo que posee, y tan es verdad, que se ve la tierra florida con tanta variedad de colores, variedad de dulzuras, de sabores, ¿quién ha dado tanta belleza, tantas esencias, tantos colores? ¿Sólo la luz? ¡Ah, no! Es porque la luz ha dado las esencias, las propiedades que posee la luz. Se puede decir que la tierra es rica, embellecida por las propiedades que posee el sol, pero mientras el sol da, nada pierde de lo que posee.” Enero 6, 1933 (LP)*

*-“Pero primero tú debes saber que mi Divinidad es un acto solo; todos los actos suyos se concentran en uno solo, esto significa ser Dios, el portento más grande de nuestra Esencia Divina, no estar sujeta a sucesión de actos, y si a la criatura le parece que ahora hacemos una cosa y ahora otra, es más bien que hacemos conocer lo que hay en aquel acto solo, porque la criatura, incapaz de conocerlo todo de un solo golpe, se lo hacemos conocer poco a poco”. Diciembre 8, 1923 (LP)*

*-“Nuestras mismas obras hechas con tanto amor y magnificencia, están bajo la opresión de un gemido inenarrable, y casi bajo una humillación profunda, porque la Vida, la sustancia esencial que esconden, no es conocida aún, se conocen los velos, la exterioridad de la Creación y Redención, pero la Vida que esconden es ignorada; ¿cómo pueden dar la Vida que esconden y los bienes que poseen? Por eso nuestras obras suspiran, reclaman sus justos derechos, que sea conocida mi Divina Voluntad.” Mayo 28, 1929. (LP)*

**NOTA- 38. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

Un río, para un hombre es un río, pero para el demonio hambriento para quien el agua es fuego podrá parecer semejante al fuego. No por ello se puede decir que existe el río para el demonio, ni que no existe para el hombre. De la misma manera todas las cosas son como espejismos; no se puede decir que existen ni que no existen.

Además, es un error identificar esta vida pasajera con la vida inmutable. Sin embargo, **no se puede decir que más allá de este mundo de cambios y de apariencias existe otro constante y verdadero**. Los hombres ignorantes piensan que el origen de este error está en este mundo, pero no es así, puesto que si el mundo es una ilusión, no es éste el que pretende engañar a los hombres. El error nace en el alma de los hombres ignorantes que sin saber la verdad, piensan que este es un mundo pasajero o que es el auténtico. Sin embargo, el hombre que ha alcanzado la Sabiduría, conoce la verdad y no comete errores porque ve la ilusión como ilusión.

**NOTA- 38. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“ ...7) *Mi Madre, como tú, vivió en **este mundo** trabajando, velando por el bien de los suyos, orando... Y aunque su alma se elevaba hacia Dios en cada instante de Su vida, ésta no salió ni un momento del camino de la Divina Voluntad. Ella supo armonizar los cuidados y sinsabores de la tierra, de modo que todo conformara un himno de gratitud a la Divinidad*”. CA-22 9-Ene-96 Jesús

-“...2) *Esas palabras que te han lastimado hoy, son las que están en boca de la mayoría de Mis hijos. Yo te hablé del Cielo, déjalos con su error y su ceguera (dijeron que el Cielo es Dios, no es un lugar). No es malo que lo digan, pero no es la forma de atraer a la gente a quien le duele aun dejar **el mundo**. **Existe un Cielo, un Purgatorio y un Infierno**. ¿No lo digo Yo en los Evangelios? ¡Qué gusto en cambiar Mis palabras!*” PC-25 10-Ago-96

-“...3) *Piensen, si en **este mundo** pueden presentarse a ustedes cosas que agradan a sus sentidos, cuántas otras hay que los afligen. Si les gusta la luz del día, los entristece la oscuridad de la noche; si les complace la primavera y el otoño, los aflige el frío del invierno y el calor del verano. Añadan a esto las penas y preocupaciones que les ocasionan las enfermedades, las persecuciones, las incomodidades de la pobreza... Las angustias del espíritu, los miedos, las tentaciones del demonio, la ansiedad de la conciencia, la incertidumbre de la salvación eterna. 4) *En el Cielo no hay muerte, ni temor de morir; no hay dolor ni enfermedad, ni pobreza, ni calor. Sólo hay un día eterno siempre sereno, una primavera continua florida y deliciosa porque todos se aman tiernamente y cada cual goza del bien del otro como si fuese suyo. En el Cielo no hay temor a perderse, porque el alma, confirmada en la gracia divina, ya no puede pecar ni perderse.*” PC-62 30-Oct-96*

**NOTA- 39. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

IV EL CAMINO MEDIO

1. Para el que quiere alcanzar la Iluminación, hay dos extremos que tienen que ser evitados. Uno es dejarse arrastrar por los deseos del cuerpo. El segundo es la vida ascética que tortura el alma y el cuerpo sin razón. El camino noble está entre estas dos vidas extremas; abre los ojos del alma a la verdad, da Sabiduría y conduce a la Iluminación.

¿Cómo es esta vida del Camino Medio? Visión correcta, Aspiraciones correctas, Palabras correctas, Conducta correcta, Vida correcta, Esfuerzo correcto, Conciencia correcta, Concentración correcta. Son estos los ocho Caminos.

Como ya se ha explicado, todas las cosas aparecen y desaparecen debido a las circunstancias y a las causas. El ignorante juzga la vida según el principio de la existencia y la no-existencia de la vida, sin embargo el hombre sabio está por encima de estas ideas. Este es el mirar del **Camino Medio** o la Visión correcta.

**NOTA- 39. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“1) *Agradece siempre cuando te encuentres en medio de las angustias del camino humano. Sé agradecida de Mi benéfico Querer porque te envío justamente las cosas de que tienes necesidad para hacerte imagen Mía.*” CA-40 10-Ene-96 Jesús

-“1) *Amada, ya que debes permanecer en casa, aprovecha el tiempo para orar y encontrarte Conmigo. La oración es como una acequia, es preciso que uno de los dos extremos esté fijo en Mí, porque de no ser así, la gracia no fluye en las almas. Haz un silencio, como tú sabes hacerlo, en tu pequeño corazón. Vive en la alegría pues la tristeza proviene a veces de la imperfección en el abandono.*” CS-111 3-Ene-98 Jesús

-“1) *Escogí dos criaturas para representar el pasado que se proyecta hacia el futuro, a continuación de Mi obra de salvación. Lo hice en el Tabor por medio de Moisés y Elías. Moisés representaba al judaísmo antiguo, Elías al judaísmo futuro, el que redimiré sirviéndome de él y Yo en medio, entre el esplendor, como puente de unión entre el Antiguo y el Nuevo Testamento.*” CA-62 12-Ene-96 Jesús

-“8) *Hijos Míos, su Dios está presente en cada uno de ustedes, hagan de su Dios el centro y lo primero en sus familias*” . PC-3 23-Mar-96 El Señor

-“*La palabra “corazón” es una de las que más aparece en la Santa Biblia, indicando el corazón del hombre, su centro más íntimo y también Mi Corazón.* PC-41 9-Oct-96 (Miami)

(Medio: centro)



**NOTA- 40. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

2. Supongamos que un tronco de árbol viene arrastrado por la corriente. Si ese tronco no se acerca a ninguna de las orillas y se mantiene en medio de la corriente, no se hunde ni sube a tierra, no es cogido por el hombre ni es cogido por un remolino, ni tampoco se pudre dentro de las aguas, con seguridad este tronco llegará al final hasta el océano. Como en esta parábola el que sigue el **Camino Medio abandona el cuerpo a la corriente** estando por encima de la idea de lo interno y lo externo, de lo bueno y lo malo, lo correcto y lo erróneo, y por encima de la idea de la Iluminación y de la inquietud.

**NOTA- 40. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“...6) Dios, **centro** y causa de todas las cosas, que encierra en sí la unidad más perfecta y de cuya unidad emana todo aquello que, partiendo de ese centro que es Dios mismo, se unifica en ese mismo principio. La contemplación de este Misterio inefable que Dios da a los que Lo aman hasta el final.” CA-29 9-Ene-96 Maria

-“Hija mía, no quiero que pierdas el tiempo, pensando en esto tú te distraes de Mí y me haces faltar el alimento para nutrirme; lo que quiero es que pienses solamente en amarme y en estarte toda **abandonada en Mí**, así me prepararás un alimento muy agradable, y no de vez en cuando como harías si continuases haciendo así, sino continuamente. ¿Y no sería esto tu grandísimo contento, que tu voluntad, con estar **abandonada en Mí** y con el amarme, fuese alimento para Mí, tu Dios?” Septiembre 19, 1899. (LP)

-“¿No sabes tú que el no abandonarse en Mí es un querer usurpar los derechos de mi Divinidad, haciéndome una gran afrenta? Por eso **abandónate** y aquieta tu interior todo en Mí y encontrarás la paz, y encontrando la paz me encontrarás a Mí mismo.” Abril 9, 1900 (LP)

-“Hija, el acto más bello y que más me agrada es el **abandono** en mi Voluntad, pero tanto, que no se recuerde que existe el propio ser, sino que todo para ella sea el Divino Querer. Si bien el dolor de las propias culpas es bueno y laudable, pero no destruye el propio ser, en cambio el abandonarse del todo en mi Voluntad destruye el propio ser y readquiere el Ser Divino. Junio 23, 1907 (LP)

(Medio: centro)

>medio, día. (Del lat. medius). 2. adj. Que está entre dos extremos, en **el centro** de algo o entre dos cosas. (DRAE)

**NOTA- 41. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

Lo más importante para el que busca el camino de la Iluminación es seguir este Camino Medio, sin inclinarse a ninguno de los extremos. Hay que estar libre de todas las cosas, **sin pensar en que uno está haciendo el bien**, y sin sentir **apego** por las cosas al saber que nada nace ni muere, y que todo pasa como un sueño.

Estar libre es no asir, no adherirse. El que busca el camino no teme a la muerte ni tampoco desea la vida. No va en pos de ninguna forma de las cosas.

Cuando el hombre siente apego, enseguida comienza una vida de incertidumbre. El que sigue la senda de la Iluminación no debe tomar, permanecer, ni **apegarse** a las cosas.

**NOTA- 41. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*-“Cuidad de no practicar vuestra justicia delante de los hombres para ser vistos por ellos; de lo contrario no tendréis recompensa de vuestro Padre celestial. Por tanto, cuando hagais limosna, no lo vayais trompeteando por delante como hacen los hipócritas en las sinagogas y por las calles, con el fin de ser honrados por los hombres; en verdad os digo que ya reciben su paga. Tú, en cambio, cuando hagais limosna, **que no sepa tu mano izquierda lo que hace tu derecha**; así tu limosna quedará en secreto; y tu Padre, que ve en lo secreto, te recompensará.” Mateo 6, 1-4 (BJ)*

*-“Por eso, no son las acciones que indican el valor de éstas, sino la voluntad por la cual son animadas. Cuántas acciones aparentemente bellas y santas se encontrarán, si son hechas con fines de interés, llenas de fango; si son por fines de estima y de propia gloria, llenas de viento; si son por agradar a las criaturas, llenas de podredumbre; si por **apego** a lo que es humano, llenas de humo. Cuántas cosas esconde la paja de las acciones humanas, que en el último día de la vida, viniendo la trilla y triturando la paja, hará conocer todo aquello que dentro escondían.” Julio 26, 1927. (LP)*

*-“Hija mía, así como cuando el cuerpo contiene sangre mala que infecta la buena es necesario aplicar lavados, sangrías, punciones para sacar la sangre mala, de otra manera corre peligro de quedar paralizado por toda la vida, así el alma a la cual le falta el continuo alimento de mi Voluntad, contiene tantos humores malos, y es necesario aplicarle lavados de humillaciones para hacer salir el humor malo de la propia estima, sangrías para hacer salir el humor infectado de la vanagloria del propio yo, repentinas punciones para hacer salir la sangre mala de los pequeños **apegos** que se va formando en el propio corazón hacia las personas a las cuales se acerca al hacer el bien, de otra manera esos humores crecerían tanto que infectarían todo lo que hacen, de manera que quedarían paralizadas en el bien por toda la vida.” Octubre 17, 1925. (LP)*

**NOTA- 42. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

3. La **Iluminación\*** en sí tampoco tiene esencia, por eso, en realidad, no existe. La Iluminación existe porque existe la ilusión y la ignorancia. Si desaparece la ignorancia también desaparecerá la Iluminación. No existe la Iluminación sin lo ilusorio y no existe lo ilusorio sin la Iluminación. La existencia misma de la Iluminación viene a ser un obstáculo. Se alumbra porque existe la **obscuridad**; si la obscuridad dejara de existir tampoco habría alumbramiento. Dejan de existir juntamente lo que alumbra y lo que es alumbrado. El que en verdad busca la Iluminación, una vez iluminado, no permanece en ese estado, puesto que la existencia de la Iluminación significa todavía la existencia de la ignorancia. Al alcanzar este estado, todo es Iluminación aun en medio de los obstáculos. **La obscuridad es a su vez luz**. Hay que alcanzar tal estado de Iluminación que hasta las **pasiones** mundanas sean en sí Iluminación.

**NOTA- 42. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*“Por eso, ¿quién pondrá en fuga la densa **oscuridad** del querer humano? ¿Quién le restituirá la frescura, la belleza de su creación? Los actos hechos en nuestra Divina Voluntad, ellos serán luz que harán huir las tinieblas, y calor que plasmándolo con su calor le destruirán todos los humores malos que lo han afeado. Los actos hechos en mi Querer serán el contragolpe a todos los actos humanos hechos con la voluntad humana, este contragolpe restituirá la frescura, la belleza, el orden como fue creada la voluntad humana.” Agosto 12, 1929. (LP)*

*“Hija mía, mira qué bellas son esas nubes, cómo tapizan el cielo y forman un bello ornamento a la bóveda azul, ¿pero quién ha sido el que ha cambiado la **oscuridad** y ha hecho huir de dentro de aquellas nubes las tinieblas, las sombras negras y las ha transformado en blancas y refulgentes nubes? El sol, que invistiéndolas con su luz les ha hecho perder la **oscuridad** y las ha transformado en nubes de luz. Así que son nubes, pero ya no nubes que dan tinieblas y oscurecen la tierra, sino nubes que dan luz, y mientras que antes que las invistiera el sol parecían que hacían afrenta con su oscuridad quitándole lo bello de su azul, ahora le hacen honor y le forman un bello ornamento.” Abril 12, 1927. (LP)*

\* **Iluminación Bodhi** (बोधि) es un término en **pali** y **sánscrito**, que tradicionalmente se traduce como 'iluminación'. (*Nirvana*): *El nirvana es el estado trascendente libre de sufrimiento y de la existencia fenoménica individual; es la experiencia religiosa más identificada con el budismo. La palabra procede de un verbo que significa enfriarse o apagarse, como el final de una vela. En estado de nirvana se rompe el ciclo de la transmigración, que de otra manera sería eterno. En el hinduismo se habla de la unión con el uno absoluto (Brahman), El hinduismo utiliza el término nirvana en su contexto de mokṣa (liberación del samsara o del ciclo de nacimientos y muertes repetidos), en el que el alma o ātmān se fundirá con la divinidad o lo absoluto. Esta liberación es por tanto una fusión del alma con la divinidad. En el jainismo se refiere a la liberación de las ataduras del karma. . El Kalpasutra narra detalladamente el nirvana de Mahavira. (wiki)*

**NOTA- 43. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

4. “*Sunyata*” es la no-existencia de las diferencias, la igualdad de las cosas. Esto es porque todas las cosas en sí no tienen esencia, y como ya se ha explicado, no tienen forma real, no nacen ni mueren; es algo que no puede ser explicado con palabras. Por eso se le llama “*Sunyata*” que significa “el vacío que lo llena todo”.

Todas las cosas existen y dejan de existir por una serie de causas y condiciones. Por ello, nada existe completamente solo, todo tiene su ser en relación con alguna otra cosa. Es como la relación de la luz y la sombra, el largo y el corto, el blanco y el negro. La esencia de algo no puede existir por sí sola, y porque no puede existir por sí sola no tiene sustancia propia. Por lo mismo, no existe la ignorancia sin la Iluminación y la Iluminación sin la ignorancia. Puesto que estos dos conceptos no son diferentes en su naturaleza, tampoco puede existir una dualidad.

**NOTA- 43. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

*“Ahora hija mía, ¿ves este gran vacío en el que tantas cosas creé? Pues el vacío del alma es más grande aún. Aquél debía servir para habitación del hombre, el vacío del alma debía servir para habitación de un Dios. No debía pronunciar por seis días mi Fiat como al crear el universo, sino por cuantos días contiene la vida del hombre, y tantas veces, por cuantas veces poniendo a un lado su querer hace obrar al mío; por eso, debiendo mi Fiat hacer más cosas que las que hizo en la Creación, quería más espacio, ¿pero sabes tú quién me da campo libre para llenar este gran vacío del alma? Quien vive en mi Querer.” Julio 19, 1923. (LP)*

*-“Hija mía, el alma vacía es como el agua que corre siempre, y sólo se detiene cuando llega al centro de donde ha salido; y así como el agua que no tiene color puede recibir en sí todos los colores que en ella se reflejen, así el alma vacía, corre siempre hacia el centro divino de donde salió, y sólo se detiene cuando llega a llenarse toda, toda de Dios, porque estando vacía nada se le escapa del Ser Divino, y como no tiene color propio recibe en sí todos los colores divinos. Ahora, sólo el alma vacía, porque está vacía de todo, comprende las cosas según la verdad, por ejemplo: La preciosidad del sufrir, el verdadero bien de la virtud, la sola necesidad de lo eterno, porque para amar una cosa es de absoluta necesidad que se odie la cosa contraria a la que se ama, y sólo el alma vacía es la que llega a tanta felicidad.” Abril 29, 1906. (LP)*

*-“Mi Voluntad está por todas partes y los actos hechos en mi Voluntad corren por todas partes, en el Cielo y en la tierra; corren al pasado, porque mi Voluntad existía; al presente, porque nada ha perdido de su actividad; al futuro, porque existirá eternamente.” Agosto 9, 1921. (LP)*

**NOTA- 44. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

5. Los hombres piensan en la aparición y en la desaparición de las cosas, pero ya que no existe el nacimiento tampoco existe la muerte. Al lograr ver la realidad del mundo, despiertan en la única verdad de que no existe la vida ni la muerte para las cosas. Porque los hombres piensan que existe el “yo” sienten apego a lo “mío”, pero no puede haber nada “mío” ya que no existe en realidad el “yo”. Al conocer la no existencia del “yo” y lo “mío”, se llega a realizar la verdad de la no-dualidad.

Los hombres hacen la distinción de lo puro y lo impuro, sin embargo la naturaleza de las cosas no es pura ni impura. Ambos son productos de la mente del hombre. Los hombres piensan que **el bien y el mal** son en sí diferentes y hacen una distinción entre ellos. Sin embargo la verdad es que no existen ni el bien ni el mal. El que ha entrado en el camino de la Iluminación sabe que no existe la distinción y ha despertado en esta verdad única. Los hombres temen la desgracia y desean la felicidad. Pero al observar con los ojos de la Sabiduría, se dan cuenta de que en el mismo estado de desgracia se es feliz. Al despertar en la verdad de que la desgracia misma es felicidad, y al saber que no existe la ignorancia que priva la libertad de alma y cuerpo, y de que tampoco existe la verdadera libertad, llega el hombre a alcanzar la única verdad.

Por ello, no es que exista la contraposición entre la existencia y la no-existencia, entre la ignorancia y la Iluminación, entre la realidad y la no realidad. No es posible decir, demostrar, ni distinguir su verdadera forma. Es menester librarse de las palabras y de los pensamientos humanos y cuando el hombre llegue a ese estado podrá por fin despertar en la verdadera Sunyata.

**NOTA- 44. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

- “Así que la voluntad humana se cambia en la naturaleza del **bien** que quiere, y aunque muchas cosas que verdaderamente quiere no las haga, en la voluntad quedan como hechas, y se ve que a la ocasión de hacer aquel **bien** que quería, poseyendo la vida de ese bien, con prontitud, con todo amor, sin dudar un instante hace aquel **bien** que desde hacía tanto tiempo quería hacer; símbolo del sol que no encontrando ni la semilla, ni la flor, no da ni **el bien** de madurar la semilla, ni el bien del color a las flores, pero en cuanto le viene dado tocarlas con su luz, poseyendo la vida, rápidamente da la maduración a la semilla, el color a las flores. La voluntad humana posee con caracteres indelebles todo lo que hace y que quiere hacer, y si la memoria olvida, pero la voluntad nada pierde, contiene el depósito de todos sus actos sin que pueda perder nada. Por eso se puede decir: ‘Todo el hombre está en la voluntad.’ Si ésta es santa, también las cosas más indiferentes son santas para él; si es **mala**, tal vez aun el bien se cambia para él en acto perverso, por eso si quieres verdaderamente mi Voluntad Divina como vida, no se necesita mucho, mucho más que unida a la tuya está la mía que lo quiere, hay una Potencia que todo puede; y por parte tuya se verá con los hechos si en todas las cosas te comportaras como poseedora de una Voluntad Divina. Por eso sé atenta hija mía, y tu vuelo sea siempre continuo en el Fiat Supremo.” Marzo 19, 1935. (LP)

**NOTA- 45. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

6. Así como la flor de loto no florece en las altas montañas de aires puros, sino más bien en el sucio lodo, la Iluminación no existe sin la ignorancia. Esta **ignorancia** misma viene a ser la semilla de la **Iluminación**. Como no se consiguen tesoros incalculables sin sumergirse hasta el fondo del mar, así quien no se sumerge en el mar de la ignorancia no alcanzará la joya de la Iluminación. Sólo después de haberse sentido perdido en las quebradas de las montañas de los egoísmos, el hombre podrá desear de ir en búsqueda del camino que lo llevará a la Iluminación.

Según la leyenda, un anacoreta tenía un deseo tan grande de encontrar el verdadero camino que subió a un monte cubierto de espadas y se tiró al fuego. Antes de convertirse el mismo en llama, sintió una frescura dentro de sí. Puesto que la ignorancia es a su vez Iluminación en la montaña cubierta de espadas de orgullo y avaricia y aun en el gran fuego del odio sopla el viento fresco de la Iluminación.

**NOTA- 45. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“1) Busco almas que Me comprendan. Sin ellas, sin Mis amados, Yo no actúo y si ellos Me aceptan, se cumplirá Mi obra. 2) Tengo sed de los que Me ofenden y deseo que se informen de sus faltas, porque una de las principales faltas que las aleja de Mí es la **ignorancia**. Ellos no conocen lo que ayuda y lo que hace daño. Han endurecido de tal modo el corazón, que se han hecho como una roca sobre la cual se abaten las olas del mar. Pobres Mis amados, ¿qué harán sin Mí? ¿Quién los sacará de su miseria? Yo lo haré junto con aquellos que Me aman.” CA-7 6-Ene-96 Jesús.

-“...2) ¡Cuán sabio es, por tanto, el que se deja llevar por Mí! Parece que no obra la criatura abandonada a Mí, sin embargo, obra con tanta eficacia que tiene la fuerza divina en sí y la difunde a los que están cerca y lejos. ¡Qué **ignorancia**, en cambio, querer gobernarse por sí mismos!” CA-126 22-Ene-96 Jesús

-“Y Jesús: “Tú debes saber que el acto más noble, más sublime, más grande, más heroico, es hacer mi Voluntad y obrar en mi Querer, por eso, a este acto al que ningún otro podrá igualar, Yo le hago gala de todo mi Amor y generosidad, y en cuanto el alma se decide a hacerlo, Yo, para darle el honor de tenerla en mi Querer, en el acto en el que los dos querer se encuentran para fundirse el uno en el otro y hacerse uno solo, si está manchada la purifico, y si las espinas de la naturaleza humana la envuelven, las destrozo, si algún clavo la traspasa, esto es, el pecado, Yo lo pulverizo, porque nada puede entrar de mal en mi Voluntad; es más, todos mis atributos la invisten y le cambian la debilidad en fortaleza, la **ignorancia** en sabiduría, la miseria en riqueza y así de todo lo demás. En los otros actos permanece siempre alguna cosa de sí, pero en éstos queda el alma despojada de toda sí misma, y Yo la lleno toda de Mí.” Julio 25, 1917. (LP)

**NOTA- 46. -LA ENSEÑANZA DE BUDA” DHARMA”- (Cap. 2)**

7. La Enseñanza de Buda consiste en estar libre de dos cosas contrapuestas y conseguir la no-dualidad. Por ello quien elige uno de los dos extremos y se **apega** a él, aun siendo esto el bien o lo correcto, comete un error. Quien siente **apego** por el “yo” se equivoca y nunca podrá librarse de los sufrimientos. Sin embargo, considerar que no existe el “yo” es también erróneo, y no será de ninguna utilidad la práctica del camino de la verdad. Por lo mismo, también son ideas erróneas pensar que todas las cosas son mutables, así como lo es el pensar que no lo son. También es erróneo decir que todo es sufrimiento, como lo es el decir que todo es placer. La Enseñanza de Buda es **el Camino Medio** que trasciende y unifica estos dos extremos.

-FIN DEL CAPÍTULO SEGUNDO-

**NOTA- 46. HERMENÉUTICA CRISTIANA**

-“Es necesario para Mí: Cuánto habría sufrido si no te contentara, si no hubiera condescendido a lo que tú quieres, y tú no me hubieras permitido que Yo mandase los castigos, entonces era necesario adormecerte. En ciertos tiempos tristes y de necesidad de castigos, es necesario elegir **el camino intermedio** para hacernos menos infelices”. *Julio 23, 1912. (LP)*

-“Hija mía, entre Creador y criatura no hay otra cosa que corrientes de amor, el pecado rompe esta corriente y abre la corriente de la Justicia; mi Justicia defiende los derechos de mi Amor ultrajado, de mi Amor despedazado entre Creador y criatura, y haciéndose **camino en medio** de ellas quisiera reunir este Amor despedazado. ¡Ah! si el hombre no pecara, mi Justicia no tendría qué hacer con la criatura, conforme comienza la culpa, así la Justicia se pone en camino; ¿crees tú que Yo quisiera castigar al hombre? No, no, más bien me duele, me es duro el tocarlo, pero es él mismo quien me forza y me induce a castigarlo.” *Abril 12, 1922 (LP)*

-“Hija mía, **mi Voluntad es el centro y las virtudes son la circunferencia.** Imagínate un rueda en la que en el centro están concentrados todos los rayos, si uno de estos rayos quisiera separarse del centro, ¿qué sería de él? Primero que haría el ridículo, y segundo quedaría inoperante, porque no estando más unido al centro no recibiría más vida y quedaría muerto, y la rueda al rodar se deshacería de él; así es para el alma mi Voluntad, mi Voluntad es el centro, cualquier cosa, aun santa, virtudes, obras buenas que no son hechas en mi Voluntad y sólo para cumplir mi Querer, son como rayos separados del centro de la rueda, y son obras y virtudes sin vida, por eso jamás pueden agradarme, y más bien hago de todo para deshacerme de ellas y castigarlas.” *Abril 4, 1912 (LP)*

>**medio.** dia. (Del lat. medius). adj. Que está entre dos extremos, en **el centro** de algo o entre dos cosas.

>**centro.** (Del lat. centrum, y este del gr. κεντρον, aguijón, punta del compás en la que se apoya el trazado de la circunferencia). Lugar de donde parten o a donde convergen acciones particulares coordenadas.

## CONCLUSIONES

En el budismo se percibe una apreciación aparentemente ambigua: por una parte se nos dice que no existe nada que pueda ser llamado un **“yo”** y por otra **se admite** sin embargo, que considerar que no existe el “yo” es también erróneo. Esta ambigüedad es comprensible ya que negar la existencia del yo supone afirmarlo.

**En cambio** en el cristianismo se distingue dos yoes: existe el **yo espiritual** dado por el alma que se acuerda de Dios y de su origen divino, y existe también el **yo inferior** de la carne que se acuerda de las pasiones (son los recuerdos del yo). Para ser perfectos **hay que saber olvidarse de uno mismo**, en todos los recuerdos, las exigencias, las miedosas reflexiones del yo humano. El yo razona humanamente y se juzga a sí mismo humanamente, aplicando a Dios su juicio (para impedirle al espíritu dominar al yo humano).

En el cristianismo se sostiene en cambio que “no hay cosa que no dependa del primer acto, **todas las cosas creadas dependen del primer acto** hecho por Aquél que las ha creado”. No obstante esto la interdependencia de las criaturas es querida por Dios. Ninguna criatura se basta a sí misma y por lo tanto dependen unas de otras. Se subraya que aunque la persona tiene libre albedrío esto es así porque la causa primera que es la voluntad de Dios así lo dispuso.

El alma no es un efecto de una serie de causas y condiciones sino que el **alma** es un ente divino que Dios crea para cada uno de los hombres: compañera en la existencia que está en lo profundo del **yo**. El cuerpo siendo el templo del alma puede estar vivo mientras que ésta esté muerta por el



pecado mortal. En el cuerpo el ojo es luz. Si el ojo es puro, todo el cuerpo estará iluminado pero si el ojo es turbio, toda la persona estará en tinieblas (*“La lámpara del cuerpo es el ojo. Si tu ojo está sano, todo tu cuerpo estará luminoso;...” Mateo 6:22*).

Cuando la persona se arrepiente del mal cometido humildemente, el alma, impulsada por esa actitud, se complace en bajar por el camino al anonadamiento del yo, aspirando a subir de nuevo, atraída por la Gracia de Dios. El arrepentimiento al hombre pecador le hace renacer espiritualmente, destruyendo la carne corrompida del yo viejo, deshaciendo el yo mental aún más enfermo como si la voluntad de redimirse fuera un ácido, un ácido que ataca y destruye esa envoltura malsana. (524 MV)

El concepto “pecado” es una realidad que la doctrina budista reconoce considerando que *“si alguien se arrepiente, el pecado deja de ser pecado, pero si no nace el arrepentimiento, el pecado será pecado para la eternidad y no dejará de acusarle”* (según *“El camino de la práctica”: II. Las prácticas del camino. N. 12. Pág. 174 del texto budista que comentamos*).

Según el cristianismo en el hombre existen tres estratos (el inferior, animal; el estrato intermedio, moral; el estrato superior, espiritual), que debe orientar los tres hacia un único fin: poseer a Dios. El alma debe tener una gran voluntad dominio para tener sujetas todas las fuerzas del yo haciéndolas esclavas de una única finalidad: merecer poseer a Dios. (17 MV). El alma sabe, al menos confusamente, cuánto tiempo le es dado de vida y el alma incita a todo el yo a actuar y a obrar bien.

El **deseo** no es sino un acto retenido y paradójicamente en el cristianismo la criatura debe perder el deseo de hacer su voluntad para que

la Divina Voluntad le señale el camino y le participe la semejanza de su Creador consumiéndose en **el deseo** de Dios en este pobre día que es la vida.

Según esto el budismo no sólo pretende eliminar todos los deseos (sean buenos o malos) sino que también se quiere ir contra las ideas (sean buenas o malas) entre la cuales está la de un Ser supremo. La creencia en un dios supremo del universo es un grave error- según el budismo- para la verdadera libertad del ciclo de nacimientos y muertes sucesivos.

Ciertamente como expresa el budismo los deseos mundanos deben cesar porque no pueden saciar aunque al principio embriaguen los sentidos, en realidad embotan poco a poco y cesan de hacer ilusión. En cambio en el cristianismo los deseos de los bienes del Cielo sacian y parecen nuevos siempre. Así estos santos deseo no engendran fastidio porque siempre quedan satisfechos y la saciedad no engendra disgusto, porque van siempre unida al deseo. De ahí que el alma permanece siempre saciada y siempre deseosa de aquellos goces celestiales. *(PC-62 30-Oct-96 El Señor)*

En el budismo se nos dice que “no hay un dios supremo o un creador en el Dharma del Buda” y que los que dicen que todo es por la voluntad de dios, por el destino o por causalidad sustentan puntos de vista erróneos. *(DHARMA. CAPÍTULO PRIMERO: La causalidad: 3)*

Concatenando con esta idea en este extracto se dice expresamente que: “*El cuerpo y el alma son efectos de una serie de causas y condiciones. Cap. Segundo, 1*” y que “*...todas las cosas fueron creadas por una serie de causas y condiciones..cap. segundo: III. El estado real de las cosas.*”). Esto implica claramente desestimar la idea de un Dios creador.

El budismo trata inútilmente de liberarse de la idea de “Dios” sustituyéndola por la idea de “*Buda*” o “*Amida Buda*” (“*Al imaginar en la mente la figura de Buda...*” cap. 5, 4) dado que “Dios” es el Ser supremo que en las religiones monoteístas es considerado hacedor del universo y en las politeístas el ser sobrenatural que tiene poder sobre un ámbito concreto de la realidad y sobre el destino de los seres humanos, el apego a tales ideas impediría alcanzar la liberación (*nirvana*).

Y esto por el significativo hecho de que dentro de la enseñanza budista se acabe por admitir dos tipos de poder: tanto el del esfuerzo personal (*jiṛiki*) como la del poder de Amitabha Buda (*tariki*) según la escuela de la Tierra Pura.

Hay una cierta analogía entre la idea de Dios y la de *Amida Buda* en el sentido de ser símbolos que se refieren a fuerzas divinas que ayudan al ser humano a la “salvación”. Desde una hermenéutica cristiana “*Amida Buda*” sería como el Dios desconocido al que se refiere San Pablo: “*Pues al pasar y contemplar vuestros monumentos sagrados, he encontrado también un altar en el que estaba grabada esta inscripción: «Al Dios desconocido.» Pues bien, lo que adoráis sin conocer, eso os vengo yo a anunciar.*” (*Hechos 17, 23*)

Siendo así que el *Buda* sería aquel que ha eliminado por completo todas las perturbaciones mentales y las impresiones grabadas en su mente tal y como parece ser la idea de “dios”. “*Buda*” se utiliza como epíteto y por antonomasia, siendo una característica de la persona que sigue el Camino del Medio y ha obtenido la iluminación (*nirvana*\*). “*Buda*” como símbolo significativo debe provocar en uno mismo la serie de reacciones que se despierta en el que sigue el camino del Medio. Como símbolo la palabra

“Buda” no es otra cosa que el estímulo cuya reacción es dada por anticipado, esa parte del acto que sirve como gesto para provocar la otra parte del proceso que culminarían en la experiencia llamada “iluminación” (*nirvana*). El término “*Amida Buda*” simbolizaría el Buda representante de la supremamente de todos los Budas (*trad. literal: “Luz infinita Completamente Consciente” según el budismo de la Tierra Pura*) un modelo original, un arquetipo que sirve como pauta para imitarlo.

Aún comprendiendo que el budismo proponga con esto evitar el apego a la idea de un Dios creador como obstáculo (*Los hombres se adhieren a los productos de su imaginación, nota 15*) hay que distinguir la idea de Dios con la creencia en Dios.

-La **idea de Dios**(\*) entendida como una imagen o representación que del objeto percibido directamente queda en la mente es algo obviamente que para el ser humano es aquí inalcanzable. En este sentido la idea que nos podamos formar y a la que nos apeguemos ciertamente puede ser un obstáculo y predispone a la idolatría de la propia imagen de un Dios creador. Ciertamente nadie es digno de pronunciar el nombre de Dios según frase atribuida a San Francisco de Asís...

---

(\*) -“Y, sobre todo no seáis de aquellos que se aprestan a perseguir a Dios en su Idea, en la Iglesia Romana, en la Fe, al perseguir a Jesucristo en sus pequeñas voces. No persigáis a Jesucristo os repito, porque El, al perseguir vosotros a sus instrumentos, os dice con su divina y justa sinceridad: “¿Por qué me perseguís?. Cap. I, vers. 17: El justo vive de la fe. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo a los Romanos. María Valtorta.

-“No existe otro Dios más que Nosotros, que somos Uno y Trino. No existe otra Religión más que nuestra religión secular. No existe otro futuro en la Tierra y fuera de ella más que el que se lee en los Libros santos. Todo lo demás es sólo Mentira cuyo destino es ser desenmascarado por El que es Justicia y Verdad.” Los Cuadernos 1944. María Valtorta. Italia, Centro Editorial Valtortiano, 2003., p. 33.

-La **creencia de Dios** como firme asentimiento y conformidad con una verdad de fe revelada y por tanto no formada por el ser humano sino recibida como noticia es factible. Se trata de aceptar un hecho (la existencia de Dios como Ser real y verdadero) como seguro o cierto.

Precisamente aquí está la diferencia esencial entre el budismo y el cristianismo: en la fe que se ponga o no en la creencia de la idea de un Dios revelado según el texto de la Biblia y no en la idea que personalmente nos formemos de El.

Desde un hermenéutica cristiana es precisamente la idea de Dios creador la que proporciona fuerza, poder, cohesión, victoria, salvación contra las creencias humanas. La fe en Dios, Ser Viviente, es un conocimiento poderosísimo para creer: “el justo vive de la fe” puesto que Dios se hace visible a la razón del hombre inteligente mediante las cosas creadas. Negarlo supone una actitud soberbia pues se conoce a Dios visible en todas las cosas y con todo se niega. La idea de Dios (*“Yo he dicho dioses sois” Juan 10, 34*) es una participación de la naturaleza divina no una suplantación, el ser humano obviamente no es “dios”. La iluminación cristiana está relacionada con el estado de gracia de Dios y el proceso de santificación.

La iluminación budista parece estar relacionada con el estado de “vacío” (*“Sunyata”*) que es la no-existencia de las diferencias, la igualdad de las cosas, “el vacío que lo llena todo” (*nota 24*) una especie de autocomplacencia en un estado que pudiera preceder a la iluminación cristiana, un tipo de anonadamiento místico en el mejor de los casos que podría posibilitar un cierto reflejo de la luz del espíritu santo dependiendo de la actitud del sujeto.

Encontramos en los textos budistas otra analogía en el anhelo y reconocimiento que se le da en el budismo a la importancia de la “pureza”:

*“De un alma **pura** nace un ambiente puro,”... en II. LA ESTRUCTURA DEL ALMA, 1; “La circunstancia creada por Buda es **pura....**” en II. LA ESTRUCTURA DEL ALMA, 2; “El que goza de **la pureza** del alma y del cuerpo ha roto las redes del diablo y camina por la tierra de Buda....” en II. LA ESTRUCTURA DEL ALMA, 3...*

Incluso se afirma que la pureza es lo que logra evitar las tentaciones de los deseos: *“Si los hombres tuvieran sus almas llenas de **pureza**, justicia y desinterés, no habría cabida para las tentaciones de los deseos.” (Cap. 4, Pasiones mundanas.)*

En el cristianismo el alma pura llega a vivir como si no tuviera más cuerpo, los hechos son puros si están en conformidad con la voluntad divina y realizadas con recta intención. La impureza humana hace alejarse la gracia del Espíritu Santo. El alma que posee la pureza atrae a Dios que encuentra su misma imagen . El alma que posee la pureza conserva en sí su primer esplendor que Dios le dio al crearla. *(LP. Vol. 03)*

Se nos dice expresamente en el Evangelio que:

*“La **pureza** tiene un valor tal, que un seno de criatura pudo contener al Incontenible, porque poseía la máxima pureza posible en una criatura de Dios. La Santísima Trinidad descendió con sus perfecciones, habitó con sus Tres Personas, cerró su Infinito en pequeño espacio- no por ello se hizo menor, porque el amor de la Virgen y la voluntad de Dios dilataron este espacio hasta hacer de él un Cielo – y se manifestó con sus características:...” (MV)*

Podría concluirse en esta parte que la tendencia en el budismo a la “iluminación” (*bodhi*, *nirvana*) es fruto de esa tendencia natural de las almas hacia la Divinidad, que en la vida misma del alma se manifiesta con sus luces del reflejo de una Luz-Amor eterno que las ama, pues en cualquier religión o creencia el ser humano siente una Presencia invisible.\*

---

\* -“Las almas recuerdan. ¿Por qué lo hacen? Porque Dios, así como le dio a Adán la esperanza de una redención, de esa redención, a fin de mitigar contemporáneamente el rigor de la condena, del mismo modo le dejó el recuerdo del tiempo feliz para que le confortara en el dolor del exilio y para que fuera para los hijos de Adán el estímulo santo a amar a El que para ellos era el Desconocido.

*Y no sólo eso pues, al crear las almas, Dios no privó a estos hijos del hombre de esa natural inclinación hacia la Divinidad que, por sí sola puede ayudar a alcanzar el fin por el cual ha sido creado el hombre: amar al Señor, al Dios omnipotente y omnipresente, cuyo Todo incorpóreo colma el infinito y a quien el hombre siente, más o menos exactamente, y ve en todo lo que le rodea, le penetra y le asombra. (...) Pero en todos los casos y en todas las cosas, el hombre siente una Presencia invisible y potente, tanto si la niega – y al negarla ya admite su existencia, pues se niega sólo lo que existe y que se sabe que muchos otros creen – como si la odia y con su odio confiesa que Ella existe, como si la ama y con su amor proclama que la cree real y que un día espera no ya creer (en Ella) sino gozar de Ella.*

*Dios hizo lo siguiente: dejó en el hombre la inclinación hacia el Bien supremo. (...)” (MV) Los Cuadernos 1945-1950, p.313.*

## BIBLIOGRAFÍA\*

**BJ.** *La Santa Biblia de Jerusalén, 1976.*

**CA:** *La Gran Cruzada del Amor.*

<file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/rivas/cruzada%20amor%20.pdf>

**CI:** *Catecismo de la Iglesia Católica.*

[file:///C:/Users/villa/Desktop/catecismo\\_iglesia\\_catolica.pdf](file:///C:/Users/villa/Desktop/catecismo_iglesia_catolica.pdf)

**CM:** *La gran cruzada de la Misericordia.*

<file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/rivas/cruzada%20misericordia%20RIVAS13.pdf>

**CS:** *La gran cruzada de la Salvación*

<file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/rivas/cruzada%20salvacionRIVAS5.pdf>

**DH.** *Dharma. La enseñanza de Buda. Capítulo SEGUNDO. La causalidad. Bukkyo Dendo Kyokai, 2006.*

<file:///C:/Users/villa/Desktop/BUDISMO/4%20nobles%20verdades.pdf>

**DHH.** *Dios habla hoy. Sociedad Bíblica Americana. III Conferencia General del Episcopado Latinoamericano. Puebla- México. 1979.*

**LP:** *Luisa Piccarreta. Libro de Cielo.*

<file:///C:/Users/villa/Desktop/DIVINA%20VOLUNTADLIBRO%20DE%20CIELO.Obispos.pdf>



**MVL. Valtorta, Maria. Lecciones sobre la Epístola de San Pablo. Italia, Traductor: Santiago Simón Orta. (Libro electrónico.)**

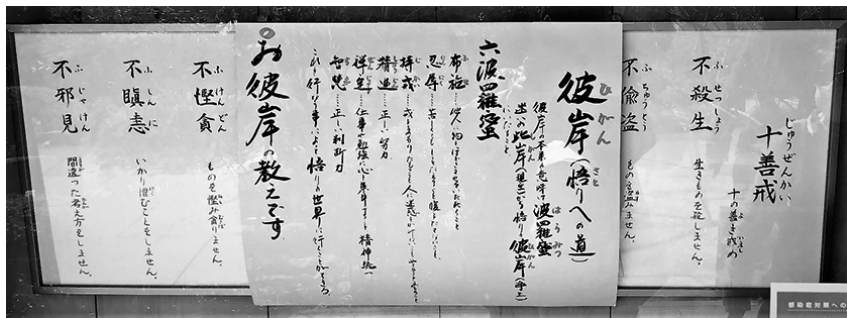
**MV. Valtorta, Maria El Evangelio como me ha sido revelado. (Libro electrónico)**

[file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/primero\\_vida\\_publica.pdf](file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/primero_vida_publica.pdf)

**PC: La puerta del cielo.**

<file:///C:/Users/villa/Desktop/valtorta/rivas/puerta%20RIVAS3.pdf>

(\*) *El autor agradece a todos los que directa o indirectamente han contribuido a la realización de este ensayo. En cuanto a las ideas expuestas expreso mi adhesión a la doctrina del magisterio de la Iglesia Católica en cuestiones relativas a la fe cristiana. Negritas y subrayados del autor.*



EXPUESTO EN EL TEMPLO DE KORYU-JI DE LA SECTA SHINGON DEL BUDISMO

Zyuzenkai (十善戒) : diez preceptos

LOS DIEZ MANDAMIENTOS (PRECEPTOS) BUDISTA (十善戒)

1. 不殺生 (ふせつしょう) むやみに生き物を傷つけない  
No matar. No lastimar a las criaturas.
2. 不偷盜 (ふちゅうとう) ものを盗まない  
No robar las cosas o propiedades de los otros.
3. 不邪婬 (ふじゃいん) 男女の道を乱さない  
No tener un comportamiento promiscuo.
4. 不妄語 (ふもうご) うそをつかない  
No mentir.
5. 不綺語 (ふきご) 無意味なおしゃべりをしない  
No hablar sin sentido. (No criticar).
6. 不悪口 (ふあくく) 乱暴なことばを使わない  
No usar palabras violentas. (No insultar.)
7. 不兩舌 (ふりょうぜつ) 筋の通らないことを言わない  
No ser hipócrita (“lengua doble”).
8. 不慳貪 (ふけんどん) 欲深いことをしない  
No codiciar. (No envidiar las pertenencias de otros).
9. 不瞋恚 (ふしんに) 耐え忍んで怒らない  
No tener ira u odio. (No enojarse).
10. 不邪見 (ふじゃけん) まちがった考え方をしない  
No pensar equivocadamente. (Pensar correctamente).



### モーセの十戒

1. わたしのほかに神があつてはならない。
2. あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。
3. 主の日を心にとどめ、これを聖とせよ。
4. あなたの父母を敬え。
5. 殺してはならない。
6. 姦淫してはならない。
7. 盗んではならない。
8. 隣人に関して偽証してはならない。
9. 隣人の妻を欲してはならない。
10. 隣人の財産を欲してはならない。



Vitral decimonónico de la Sinagoga y Museo Alsaciano de Estrasburgo, Francia. (De Wikipedia)



Bibliotheca Rosenthaliana, Amsterdam. (De Wikipedia)